

---

# 千年王城

黒雛 桜

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千年王城

### 【Nコード】

N1379D

### 【作者名】

黒雛 桜

### 【あらすじ】

ハルは引越し先のまちで、様々な未知との遭遇をする・・・（空いた時間にもご覧になってください。注）実在の京都府とは関係ありませんので、ご理解のほど、よろしく願います。ペコリ現在1話から細かい部分に修正をかけています。見やすいようにしているだけで、ほぼ違いはありません。ご了承くださいペコリ。

## 1 ハルと千年王城

春

もう少しで俺は15歳の誕生日を迎える。

この春休みが终れば、中学校生活最後の学年になるんだ。

大事な仲間と受験ギリギリまで遊んで、

卒業式が终ったら好きなあのコに告って、

ずっと東京で暮らしていくんだ……

ずっと暮らして……

ずっと……

……そう思ってたのに！

「てか、何でこの時期に引越さなきゃなんねえんだよ……！」

俺は高速道路を走る乗用車の車内で、親父に不満をぶちまけた。  
住み慣れた東京から家族で引越し。

「ははは。仕方ないだろ？ 春彦。転勤なんだから」

笑いながら息子をなだめられると思ってるのか？ 父よ。

親の仕事の都合だかなんだかしらねえが、俺の事はどうでもいいのか？！

「お兄ちゃんわがまま言いすぎ」

俺をバカにするような口調で横やりを入れたのは、妹の秋奈。  
この春から中学生になるム力つく妹……

「大丈夫よ、はるちゃん。転校したってすぐにお友達できるわよ。  
だって、京都はすてきなところだもの！」

親父に負けず劣らず、能天気なことを言ってるのは、俺の母。

柔よく剛を制す

俺がどんなに頑張って反論しても、母には効かない……  
ってゆうか『はるちゃん』はやめろって。

引越しなんて嫌だった。

だが今、大好きな東京都を離れて新天地である京都府へ……車で  
移動中だ……（ぐすん）

俺は櫻井 春彦（14）

後1週間もすれば、15になるけど。

生まれ育った東京を去り、親父の新しい勤務地、京都で暮らすことになった。

京都ねえ。

実際俺あんまよく知らねえし……

京都：日本の歴史的都市。

政治・文化の中心地となり、延暦13年に始まる千年の都。別名を『千年王城』と呼ぶ……（「京都タウンガイドMA

X」抜粋）

やっぱ、あんまよくわかんねえ。

春は出会いの季節、見知らぬ土地の京都。

ああ……嫌な予感がするのは、きっと俺だけだろうな……

## 1 ハルと千年王城（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。

まだまだ不慣れで指摘や感想いただけたらいいなと思います。  
また見てやってください^^

## 2．スパッツ現る

「ねえねえ、お母さん！ こっちの塔の前で撮ろうよ」

「あなた、あそこの橋もいいんじゃないかしら？」

「よし。たくさん記念写真撮っていいこうか」

京都に到着した櫻井家一行。

真っ先に向かったのは 観光スポット。

え？

観光……？

つてか、引越し先の家に行こうぜ？

何で観光なんだよ！！

まるで修学旅行生のようにはしぎまわり、あちこちで写真を撮すちよつと恥ずかしい家族連れ いや、これちよつとどころじゃねえよ？

かなり恥ずかしいんですが！！

記念写真を撮るのに忙しい家族を尻目に、俺は一人呆れて歩き出した。

もちろん遠くまで行けるわけないけど、人気の無い場所を見つけて腰を下ろす。

はあ、なんとなく憂鬱<sup>ユウウツ</sup>。

巨大な朱塗りの門の周りには、珍しく一人も観光客がない。  
他の場所にはたくさんいるってのに、変なの。

まあ今は一人になりたい気分だから、好都合だけどさア……

「少年、この地は嫌いか？」

突然後から聞こえる女の声に、飛び上がりそうなほどビビった。

だって、ついさっき周りを見たときは誰一人いなかったんだから！

バツ。っと振り向くと、俺の後ろには女の子が立っている。

……それも、ちょっと、変な女の子が。

顔はまあ、かわいい。

俺と同じ年くらい？

だけど。

真っ赤で肩につかない程度に切つてある髪の毛、金色っぽい目の色。

服は和服（長めの袖丈に、黒と金の帯、裋下の短い着物……着物  
の下に履いてるのって……スパッツじゃね？！）だし。足には草履？

かなりの時代錯誤だと思うが！

いやいや、それ以前になんかおかしいって！！



……取りあえず関わらない方がいいと思う。  
シカトだ。シカトしとこう。

「……」

この場を離れようと無言で立ち上がり、歩き出そうとした。

その時！

俺の肩に何かが当たった。って、何が？

そつと右肩を見てみると、黒っぽい鉄の扇が首筋に当てられているではありませんか。

そう。鉄の扇が。

って、鉄？！ 危ない、危ないいいい！！

「少年、聞こえなかったか？ 『嫌いか？』と聞いたのだ」

かわいらしい顔に軽く怒りがこもってる。微笑んだ唇が引きつってる。目が笑ってねえよ！

ちよ、まっ……

『嫌い』なんて言えないじゃん！！

「……いえっ！ だ、大好きです！」

「やっぱり そうだと思ったのだ！」

ちよつと変わった女の子はパツと明るく表情を変え、扇を懐へしまつた。

その場にへたり込み、満足げにこの場を去っていく彼女の後姿を、俺は呆然と見つめる……

一体なんなんだよ————！！

### 3・無人の家で流れるドラマ主題歌の怪

はぁ……疲れた……

能天気家族に振り回されるわ、変なスパッツ女に会っわ。  
散々なんですわ。

やっと観光＋記念撮影が終わり、新しい住まいへと車を走らせる  
親父。

その車内で俺は、さっきの変なスパッツ女のことを考えていた。

なんなんだよ、変な質問しやがって。

それにあの格好。

現代でさすがにアレはないだろ。

俺の首に当てた鉄扇、絶対武器だって！

……はぁ……東京に帰りたい。（もう俺ん家はないけどさ）

頭を抱えてうなだれている俺を見た妹の秋奈が、一言。

「お兄ちゃん、無駄に考えるとハゲるよ？」

ブチッ

……ああ。ここが車の中じゃなかったらバックドロップかまして  
やるんだけどな。

長かった道のりはやっと終わりを迎えるみたいだ。

閑静な住宅街の細道を車で抜け、周囲の建物より頭が飛び出るマンション駐車場に車を停める。

マンションやアパートが立ち並ぶ一角に、我が家がそびえ立っていた。

11階立建ての高級マンションは夕日を背に赤く染まっている。

「なかなか立派だろう?」

得意げに話す親父……いや、お父さん。見直しました!!

「あ、はるちゃん。引越し屋さんが運んでくれた荷物全部届いてるか、先に見て来てくれない?」

前にも言っただが、母に嫌だのなんだのってのは効かないのだ!

「ちえつ。わかったよ」

俺 ってば、物わかりいいよなあ。

ってか、「はるちゃん」はやめろ。

そんなわけで俺は一人、エレベーターに乗り、10階のボタンを押す。

ぼちっとな。

どんどんエレベーターが上ると、ガラス越しにはっきりと見える夕日。

すげえいい眺め!

9・10……チン!

10階の通路を歩き、1001号室の前に立つ俺。  
やべえ、ちよつとドキドキするな。

ここが俺の新しい家かぁ。

ガチャッ

戸を開けて中へ入るとすでに荷物は運ばれ、全部揃っているみたいだ。

家具やダンボールが所せましに置いてある中、リビングでテレビの音が聞こえてきた。

……え？ テレビ？

チャッチャ、チャチャチャ　チャッチャ、チャチャチャチャーチ  
ヤチャ　チャチャーチャチャ

首をかしげながら、そーっとリビングに近づくと、夕方の再放送ドラマの主題歌が流れている。

やっぱりテレビの電源入ってる……！

引越し屋のヤロウ、勝手にいじりやがったな……！

腹立たしさを押さえてテレビの電源を切ろうと、勢いよくリビングのドアを開けた俺。

バンッ……！

.....

リビングで目にしたのは……

ありえねえ。

さっきの変な（赤毛に金目、着物の下にスパッツ着用）女じゃねえか————！！

「ああ、少年。遅そすぎだぞ」

『ああ、少年。』じゃねえよ！！何その俺が悪いみたいな言い方！いやいや、それよかなんで俺ん家にいんの？！何でドラマ見てんの？！

ってゆうか……俺、どうつつこめばいいんだー？！

### 3・無人の家で流れるドラマ主題歌の怪（後書き）

サブタイトル長くてすみません【汗

#### 4・朱雀現る

なぜか俺の家に勝手に上がりこみ、無断でテレビをつけ、悪びれもなく座りながらドラマを見ている　観光地で会った、かなり変わった見ず知らずの女の子。

やべえ、考えすぎてわけ分かんなくなってきた。  
なんだ、この展開？

そんな時、玄関の戸が開く音が。

ガチャッ

ドアを開けてやって来たのは、櫻井家ご一行。

親父たちだ……！助かったあ！　親父でも母さんでもいい！　こいつを追っ払ってくれ！！  
心の中でそう願った。

切に願った……

願った……



親父はリビングを見回した後、目線をテレビの前に座る人物へ走らせ、一言。

「朱雀さん！早かったんですね、何も用意できなくて申し訳ありません」

……ん？

どどど、どうなってるんだ？ この展開は？

「主殿、気にすることはない。わたしの方で勝手にさせてもらっぞ」  
変な女、もとい、『朱雀さん』が微笑んで応える。

「朱雀ちゃんがいれば、ここでの暮らしも安心ねえ」母の意味不明の言葉。

「ホントだよ、スザクちゃんが家に来てくれてよかったあ」秋奈、なにそのフレンドリーっぽいノリは？

「あ、春彦は会ってなかったよな？こちらは朱雀さんだ。

“京都親善・世話焼き大使”だそうで、さっきの観光地で色々お世話になってなあ。

不慣れな土地だしいつそ彼女に住み込みで色々教わろうかと思って！」親父、笑顔でうなずきながら話す。

ちよつと待てえええ!!

なんだそのうさんくさい親善大使って!こんな子供が大使なわけねえだろうが!

いやっそれよりも、す、すみこ……住み込み?!

もちろん断固拒否しますよ。こればかりは母に何を言われても反対しますよ。

「なんだそりゃあ!俺は反対だか……」  
俺が言いかけたその時。

「少年、もちろん歓迎してくれるな?」  
朱雀さんが微笑みながら例の鉄扇を懷から取り出すのを、俺は見た……。

「次は(首を)落とすぞ?」  
につこり笑う彼女のかわいらしさと裏腹に、その口はまるで悪魔のようで。

「よ、よ、ようこそ……さ、櫻井家へっ……」

ホント、俺って物わかり……いいよね……

かくして、我が家に悪魔が住みつくことになったのだ……(うつ、

うっ、  
ぐすん。

## 5・横文字は最大の武器

春は変なやつが出てくるって言うけど、その通りだ。

俺の目の前にいるやつこそ、それだ。

般若のような形相で俺を睨み、尚なまか且つ仁王立ちしているのは昨日会ったばかりの朱雀という女の子。

俺は朱雀に謝る。

必死に、謝る……

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！ー！」

え？

なんでこんな事になってるかって？

まあ、時をさかのぼること10分前。

櫻井家は引越しの荷物がまだ片付かないうちに朝を迎えた。

リビングへ行くと、俺以外の家族はもう起きて集まっていた。

「お、春彦おはよう」親父はさっそく今日から仕事。

「はるちゃん、おはよ」母は親父の弁当作り。

「お兄ちゃん遅い」妹は朝7時からのアニメを見ている。

「ハル、よく眠れたか?」……あれ。一人多くね……?

リビングには父、母、妹　加えて同い年くらいの女の子がいますか?

櫻井家は俺含めて4人家族だよ?

「朱雀さん、じゃあよろしく頼むよ!」親父が言って、弁当と鞆を片手に家を出た。

女の子はにつこり頷き、親父を見送る。

そうだった……!

昨日会った変なスパッツ女が、我が家に住みつくことになったんだった……!!

「ってオイ、スパッツ!　なんで当たり前かのように人ん家に居座ってんだよ!」

俺はイライラをぶちまけてから、ハッと気付いた。

スパッツ女と目線が合って、背筋に冷たいものが伝ったのだ。

あ、やばいやばいやばいやばい……!

スパッツ女　じゃない、朱雀さんの眉間にシワがっ!

や、やばいやばいっ!!　鉄扇取り出そうとしてるう!!

忘れてた。

つい数時間前も危険なオーラを放ってたじゃん。  
こいつ、本気で俺の首落とす気だ。

な、何とかしないと！！

思いつく限りの選択肢は3つ。

- 1．戦う（……俺、武器無いわ）
- 2．逃げる（……え、どこへ?!）
- 3．必死に謝る（……俺のプライドが許さん）

もちろん生存率の高い選択肢を選ぶさ。

そんなわけで

冒頭に戻る。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！」

プライドなんていくらでも捨ててやるぜ。（ぐすん。

「少年、そのような陳腐な言葉で許しを請おうなどとは！」

うつそお。俺の必死さは朱雀さんには伝わっていないようで。  
やばい！

「うつ嘘ウソ！ 冗談だって！ ブラックジョークだぜ?!」

自分で言うのもなんだけど……… すぎえ苦しまぎれ。  
これじゃあ朱雀さんを何とかするのは無理だわ。  
こりゃ死んだな、俺。

ところが、朱雀さんは首を少しかしげて、一言。

「……ぶ、ぶら、ぶらつく………？ うむ。そうゆうことなら、仕方ないな………」

あ、もしかしてカタカナ苦手なんだ？  
絶対意味分かってないよね？

そんなわけでどうやら、俺助かったようです!!

## 5・横文字は最大の武器（後書き）

私も横文字苦手です（笑



## 6・教訓その一

ほどなく、思い出したように朱雀さんが切り出した。

「それはそうと、ハル！ 私はす・す・すぱ・すぱなんたらなどではない。

『千年王城』の朱雀だ」

腰に手を当てて主張する朱雀さん。

“スパッツ” っって言えてねえし。

「へー・・・よろしく。ところで、朱雀は家に帰らなくていいのかわかんない？

お母さん心配してんじゃねえの？」

当然の質問だよな。

にしても『千年王城の』、って意味分からねえ。

「私の住処はこの都だ。それに母とは何の事だ？ わたしは南を司る四神の『朱雀』だぞ？」

……ん？！

はい。ありえねえ自己紹介、キターーーー！！

ど、どうつつこめばいいんでしょうか？ どうってゆつか、どこを？

え〜と……取りあえず……

「人間じゃないの？」

「当たり前だろう」

朱雀さん、コクリと頷く。

俺、その場に固まる。

……………

そそそ、そんなバカなああああ！！

春は変なやつが出てくるっていうけど、こいつはそんな可愛らしいもんじゃねえ。

（ま、顔はかわいいけどさ）

この悪魔のようなスパツ女      もとい朱雀さんは自分は人間じゃないって言い張るし。

……取りあえず、そのところは触れないでおこう。

朱雀さんが俺に付きまとう理由が何なのかは分からない。  
だが、分かったことが一つだけある！

それは。

教訓その一【朱雀に逆らうべからず】

俺は間違いなく彼女に主導権を奪われた。  
一体いつまで我が家に居座るつもりだ？

と、まあこんな感じで俺の朝ははじまった。  
そう、今はまだ朝。

1日が始まったばかりなんだよな……

なのに、何でこんなに疲れているんだろう、俺。  
（う、うう、ぐ  
すっ

## 6・教訓その一（後書き）

短くてすいません・・・  
毎日UPできたらいいなと思っています^^

## 7・教訓その二（前書き）

注）ちよつとだけ長いです。

時間無いし、面倒だなゝって場合は空いた時間にでも読んでください（笑）

## 7・教訓その二

丁度賑いはじめる午前10時。

京都のまちを眺めながら、目的地の四越デパートを目指して歩く俺……と、朱雀さん。

はたから見ると、俺たちはデートでもしてるように見えるだろうな。

だけど、そんなんじゃない！

「ばかもの！ この通りは危ないのだ。迂回<sup>うかい</sup>していくぞ」

「ちょ、ちょい待ち！ これで何度目だよ？！ これじゃあいつまでたっても四越デパートに着かねえんだけど！」

「こら、ハル！ この橋は真ん中を歩くのだ。端を歩くと引つ張られるぞ」

「ひ、引つ張ら……ええ？！ 一体何に？！」

「あ、ハル……。そういえばここら一帯は青龍の縄張りであった……。櫻井家に戻るぞ」

「ええー？！ 俺、四越デパートに行きたいんですが」

で、結局四越デパートにたどり着かないまま昼を迎え、公園のベンチで一休み。

クソ朱雀め。

なにが『京都親善ホニャラフ大使』だ。全然役に立ってねえじゃんか！！  
(口に出しては言えないけど)

「なあ朱雀、通りが危ないだの橋の真ん中歩けだの、青龍がどうとか オカルト系好きなの？」

絶対そうだろ。

「お、おか、る？ ……う、うむ……そんな事よりも、落ち着いたとはいえここは魔都だぞ。気を緩めるわけにはいかないのだ」

あ、質問サラッとながしやがった。

「ぶつ。現代に魔都って……！」

この子、重症だと思うよ。うん。

俺は軽く鼻で笑ってから、しまった！ と、心の中で絶叫。  
一気に血の気が引いて、変な汗が滝のように流れている。

「今、わたしを馬鹿にしたのか……？ 今、わたしを愚弄しただろ  
う………？」

や、やばくね？  
なんか、やばくね？

朱雀さんの握った拳が小刻みに震える。ま、間違いなくご立腹だ  
っ！

俺の目の前に般若が！顔が怖いんですがっ。  
鉄扇しまって、しまってくださいっ！

.....

一度キレると、謝ったくらいじゃ怒りは納まらないらしい。  
その後俺は彼女の機嫌を直すべく、そりゃもう頑張ったさ！ 財  
布が軽くなるまで頑張ったさ！！  
（アイスおごったり、クレープおごったり、たい焼きおごったり  
tc.....）

だって首が落ちるか落ちないかの瀬戸際ですから！！  
命は金に代えられねえ.....だけどっ。う、ううっ。俺のなけなし  
の小遣いが.....。

ガチャッ

「奥方、只今戻りました」  
「.....ただいま」



「おかえりなさい」朱雀ちゃん、はるちゃん」  
「おかえりい スザクちゃん！ あ、お兄ちゃんどうだった？ デ  
ートは」

俺たちが家に着いたのは夜7時。

あれからも、あの道がダメ・この橋はダメって散々振り回される  
始末。

おかげ様ですっかり夜になったぜ？

母に『ちゃん付け』されても、つつこむ気力、ゼロだ。

秋奈にからかわれてもジャイアントスイングひとつすら、かませ  
ねえ。

つ、疲れたあ……

あ、スパッツ女について二つ目の教訓。

教訓その二【朱雀の前で含み笑いするべからず】

……今日は俺、もう寝ます！！（ぐすん。

## 8・リビングの中心で悲しき願いを叫ぶ

……まぶしい……もう朝か……

「あはははは……！」

「きやははは……！」

……

「答えは2番の“ねっちよりマリモ”だと思ったのだがな」

「それ、おしいよ！　一応“鼻ちようちんの三郎”に関係あるもん  
」！」

……

「やはりわたしはささくれがこの三角関係の諸悪だと思うが」  
「うんうん。でも、みかんも捨てがたいよね？」

……あと、5分だけ……

…………って！

この状況で寝てられっかよ……！

隣の部屋（妹の部屋）の会話がすごい意味不明で怪しいんですが。

秋奈と話してるのって、たぶん朱雀だ。いや絶対朱雀だ。

いやいやいや、別に誰と話そうがどうだっていいさ。

だけど、『ねっちよりマリモ』って何？！

俺の寝起きは最悪。

秋奈と朱雀の笑い声で起こされるなんて。

「「わはははははー！」「」

……あ、まだうるさい……

そんなこんなで騒々しく俺の一日がはじまる。

「おはよう春彦」 俺に挨拶した後、親父はすぐに出勤。

「おはよ、はるちゃん」 母は食卓テーブルに3人分の朝食を用意している。

「お兄ちゃんビリだよ」 秋奈、黙れ。

「お早う、ハル」 ……やっぱりまだいたか。

さっさと自分の家に帰れ、スパツ女め。

つてのはもちろん心の中でつぶやくだけ。

口に出したら最後。俺の人生はわずか14年で潰<sup>つい</sup>えるだろう。

「……オハヨ」

俺、なんかちょっと悲しくなってきたな……（ぐすん。

「あ、そうそう。明日あきちゃん入学式よね？ はるちゃんも始業式明日でしょ？」

母さんが急に思い出したように切り出した。  
そう、ついに明日から学校なのだ。

「俺は始業式の後授業あるし、秋奈に付いててやれよ」  
「でもね〜せっかく新しい学校だし、はるちゃんの担任の先生とかに」  
「挨拶しなきゃ」

挨拶は秋奈と同じ時にすりゃあいだろうが！（同じ中学なんだし）

「いや、いいよ別に」  
「だめよお！ 最初が肝心なのよ？」

いっつもこれだ。どんなに反論しようが母には効かないし。

「じゃあ、わたしがハルの挨拶役をしよう」

俺と、妹と、母の間に割り込んできた声の主はもちろん、朱雀。

「あら、朱雀ちゃん助かるわあ〜」  
「これも大使の務め、奥方が苦労することはないぞ」

って、オイイ！！

「ちょおつと待ったア！　なんで朱雀が母さんの代わりに来るわけ？！　それは絶対反対だか」

言いかけたその時、俺は言葉に詰まる。

「ハル、続きを言ってみろ。よく聞こえなかったか？」

朱雀さんが鉄扇を片手に持ち、もう一方の手にパン！パン！と叩きつけている。

顔は笑ってるけど、こめかみ付近に青筋がつ！

あわわわわ。

やばいやばいやばい。

マジでやばいよ、コレ。

「……い、いえっ！　ゼヒ、お願いしますっ！！」

俺の言葉に朱雀さんは満面の笑みで頷く。

つまりだ。

始業式の日、このスパッツ女が学校に来て、母の代わりに教師たちに挨拶をするって事だ。

ああ、誰か助けてください！

## 8 リビングの中心で悲しき願いを叫ぶ（後書き）

最後のハルの叫びは、森山未来くん風にどうぞ。（笑）

## 9・ハル、学校へ行く

ついにこの日が来てしまった。

新たな学校、京都市立武城たけしろ中学校

山の麓に建つ、歴史のある学校だそうだ。  
校舎は実際、ボロい。

待ちに待った入学式が今日。もちろん、妹の秋奈にとって……だ  
けどね。

俺は3年生になるため、始業式の後には授業が待っている。  
式、っていつても実際は担任の挨拶や新学期に向けての軽い説明  
のみで、クラス替えはしてないから、皆なじみの顔だろうし。

転入生の俺だけが緊張だよ……

学校に着くと、先に母と秋奈は入学式が行われる体育館へ行っ  
ちまった。

俺は一人職員室かぁ。

長い廊下を通って、とうとうたどり着いた職員室のドアを、恐る  
恐る開ける。

瞬間。

目の前の光景に俺は絶句した。

.....

「いやあ、3 - 5の生徒はみんな明るくて元気な子が多いから、何も心配は要りませんよ！」

「うむ。くれぐれもハルを宜しく頼むぞ。」

「はっはっは！ まあ安心してください、スザクさん」

職員室の来客用革張りソファーにでん。と座る朱雀さん。

向かい合わせのやや質素なイス（素材ポリウレタン使用）に座っている、ジャージを着た教師と楽しげに会話してる……

ええええ？！

「ん、ハルではないか。どうした？ そんなところに立つたままで」

俺に気付いた朱雀さんがキョトンとした顔で話しかけてきた。

『どうした？』 じゃねえよ！！

お前がどうしたんだよ？！

ホントに朱雀さん、学校に来ちゃったよー！

「おつ、君が櫻井君だね？ いやあ、今スザクさんから話を聞いていたところだよ」

あ。先生ですね？



…… 一体そいつから何を聞いたんですか。

「僕は櫻井君が入るクラス、3 - 5の担任の小山だ。分からないことがあったら、なんでも聞いてくれよ」

じゃあ、遠慮なく。

何で不審者を捕まえないんです？ 先生の目の前にいるスパッツ女はどう見ても不審人物だろうが！ 生徒や保護者には見えねえだろうがあっ！！

「…… ハル、何か言いたげな顔ではないか？」

朱雀さんが鋭い目線を俺に向けてくる。

心の中で不満を叫ぶことができなくなったら、俺 泣きますよ？（ぐすつ）

「ま、まさかあゝ。それは、ホラ、あ、新しい学校だし、緊張するなゝ…… って」

俺の苦しまぎれの言い訳を聞いた朱雀さんはにっこりと微笑む。  
嫌な予感がするんですが。

「何も緊張などする必要は無い、私がハルの側に付いていてやるからな」

いやいやいや！ 遠慮します！ 土下座でも何でもするから、家に帰ってくださいーッ！

## 10・人間万事塞翁が馬

うつ……。すげえドキドキする。

あぁっ、テンション低いクラスだったら俺馴染めるかなぁ。

朝のHRで、一通り担任の小山先生が話し終わった後、俺が呼ばれて自己紹介をする。

転入生のお決まりのパターンだよな。

そんなわけで、俺は教室のドアの前で一人緊張しているワケだ。

「入ってきてくれ！」

ドアの向こうで小山先生に呼ばれ、ドアに手をかけようとしたその時。

俺より先にドアを開けて中へ入っていく人物。

堂々と、颯爽と中へ入っていく姿を俺は廊下から呆然と見つめる

……

その人物はもちろん、

朱雀だぁ……

ちよっと待てええ！

出てくる場所、違うだろ？

職員室にいたのは、まぁ、許すよ？

だけど、この場面は違うだろおお！！

教室がざわめきだしたけど、当然だと思う。うん。

「ご学友の方々、本日より小山殿の門下になる櫻井 春彦に何卒親切にやっていただきたい」 朱雀さん、深々と頭を下げる。

なんでお前が出てきて俺の代わりに挨拶するんだ？ いやがらせか？！

「みんな、彼女は・・・ええと・・・？ 転入生の櫻井君の、まあなんだ・・・スザクさんだ」

先生、朱雀のこといまいち分かってないのにどうにかまとめましたね。

「スザクさんではない。千年王城の朱雀だ！」

朱雀さん、余計話がこんがらかるから、やめろ！

「櫻井君、中に入ってくれ」

クラスはすでに静まり返っていて、おそらく朱雀の登場でドン引きしたんだろう。

すげえ入りにくいんですが！！

「……あの、はじめまして……東京から来た、櫻井 春彦です……」

ああ、緊張も不安もどっかへ行っちゃったぜ。  
スパッツ女のせいでテンションガタ落ちだし。

「ハル、いつもの元気はどうしたのだ？」言って、朱雀が横で不思議そうに俺の顔を覗き込んでいる。  
てめえのせいだっての！

最初が肝心だからって一生懸命挨拶のシュミレーションまでしてたつてのに、こいつのおかげで……くそおっ！（ぐすん。

「よろしく願いますっつー！！」

開き直った俺はこれから始まる新生活に不安を抱きながら、ありったけのポリウムで怒鳴った。いや、怒ってたわけじゃあないけど。

はい、もうやけくそに近いです。

下げた頭をそっと上げてみる。

皆が顔を見合わせ無言で俺を見つめ、教室はシーン、といていた。

当たり前かあ……

「イエーイ！ ようこそ3・5へ！！ まあ仲良くしてこうぜえ」

突然一人の男子学生がイスの上に立って、大声で挨拶を返してき

た。

それに便乗して一斉に皆が騒ぎ出す。

「こらっ、お前ら！ ちょっと騒ぎすぎだぞ」先生の注意もそつちのけで、クラス全体が盛り上がってる。

あ、あれ？ こうゆうノリか？

「ハル・・・良い学級のような」

朱雀が珍しく目を細めて、やさしく微笑んだ。  
いつもこんな顔だったら、かわいいんだけどなあ。

「うん。なんか、すげえホッとした・・・」

感想は本当にこの通りだ。

こつちにきて、色々不安が多いせいで緊張しっぱなしだったんだ。けど、この明るいクラスを見ていて、心にかかったモヤがだんだん晴れてきたのが分かる。

どうやら、学校だけは、楽しくやっていけそうだ。

## 10：人間万事塞翁が馬（後書き）

【人間万事塞翁が馬（一般的には塞翁が馬）】：人生思いがけないことが不幸につながったり、幸福を招いたりするので、誰にも予測はつかないという事。

辞書を開いて調べたので、一つ賢くなった気分です（笑）

## 11. いまどき、むしろチンピラ風。

「俺、松井 謙吾！よろしくな」

「俺はリヨウ。この学校って標準語しゃべるやつ多いから安心しろよ！」

「ちょ、押すなって！俺だってハルと話してえんだから！」

HRが終ってからは俺の周りにはこんな感じだ。  
皆良いやつばかりでよかったと、心底思う。

「ねえねえ、櫻井君ってかっこよくない？」

「後で声かけてみようかあ」

え、マジで？

そんな朝のあたたかい交流も、授業開始のチャイムで終わりだ。  
今日は入学式が体育館であるということもあり、3時限目で授業は終わり。

### 1時限目の国語の授業。

「ん？ どうした・・・転校生の櫻井。ノートを取らなきゃダメだろ」

国語教師からの指摘で俺はドキッとする。

ノートなんて、はなっから持ってきてないワケだし。

「すみません、家に……忘れてきたんです」

俺の言い訳を聞いて、先生は仕方ないな、といった表情で見逃してくれた。

転校生でよかったー！！

「ばか者、なぜ事前に四越百貨店で文具を揃えておかなかったのだ！」

廊下側の窓から、こっそり顔を出した朱雀さんが小声で話しかけてきた。

四越百貨店……あ。デパートって言えないのか。

ってか、まだいたのか！

とゆうか。

四越デパートに行けなかったのって、お前のせいだろうがぁ！

こんのクソ朱雀ー！！

こんな調子で2時限・3時限目の授業が終ってゆく。

まあ、ところどころ朱雀の影は見えてたけど。

「おわったあー！　な、ハル！これから遊びにいかね？」

下校時間に話しかけてきたのはクラス一の元氣者・謙吾だ。鞆片手に好奇の眼差しを向けてくる。

「わりっ、俺まだ家の片付けとかあるから……ごめん、今度な！」



肩をすくめて両手を合わせて謝る俺。

残念そうな顔を見せた後、謙吾は「そうゆうことなら、仕方ねーよな。じゃ、また明日な！」言っつて、手を振り教室を出て行く。

……ホントいいやつだ。

「ハル、では家に戻るぞ」

廊下で待っていたのは、朱雀。

いなくなっていればいいな、なんて、淡い期待を持つもんじゃあねえな。

つか、『嫌だ』なんて言えるわけねえだろ？

生徒たちは早めに学校を出て行ったようで、廊下にはほとんど生徒がいない。

ただっ広く感じる廊下を、俺と朱雀が急ぐわけでもなく歩き出す。

その時、俺たちの目の前に、茶髪・耳にピアス、胸元を開けたYシャツ・ちよつとダブついたズボンの、見るからにチンピラ風のあんちゃんがふと現れた。

いやいや、中学校にいちやいけないだろ、この兄ちゃん。

11・いまどき、むしろチンピラ風。（後書き）

なんだか、読んでくれている人が増えてきて嬉しくなってきました  
いつも読んでくれている方がた、指摘や感想があれば書きこんでや  
ってください。妄想力が高まります（笑）

12・なつは6じ、ふゆは5じにかえりましょう。

そのチンピラ風のおんちゃんは、いかにもガラの悪そうな歩き方で俺たちに近づいて来た。

効果音にすると、ぺった、ぺった、ぺった……って具合か。

うわぁ……近づきたくなえ。

そう思った、瞬間。

チンピラ風おんちゃんと目が合ってしまった！

こわっ！

「よう、そこのガキ」

俺はいきなり声を掛けられ、ビクーツと肩が動いてしまう。  
しかも『ガキ』って？！

「ふうん、朱雀に気に入られるとは、大したガキじゃねえか」

チンピラ風おんちゃんは俺を馬鹿にするように、口元に軽薄な笑みを浮かべながら、ジロジロと眺めまわす。

男にじっくり見られて気分が良いはずねえ！（キレイなお姉さんなら別だけど）

そんな時、俺の後ろにいた朱雀が口を挟んでくる。

「玄武、口の聞き方をわきましろ」

朱雀の刺を含んだ言葉に思わず俺は後ろを振り返った。

エ……、朱雀の知り合い？（しかもなぜに不機嫌……？）

「ハッ。どうしゃべろうと俺の勝手だ。それに、無断で領地に入り込んできたのはテメエの方だろうがぁ！ あぁ?!」

チンピラ風あんちゃん、もとい『玄武』が凄んできた。

こっええ……

「黙れ、小童。貴様にいちいち断りを入れるとでも言うつもりか」

朱雀さん……どう見てもあんたの方が『小童』だと思いますが。

それにしても、なんだろう……？

しゃべり方とか、いつもの朱雀なんだけど。

今の朱雀を見ていると、背筋がゾクゾクするような

なんだか、怖い。

しばし睨みあっていた二人だが、面倒くさくなったのか玄武がため息をつきながら、目線を外す。

「まあ、いいや。朱雀なんかにはねえし、つか暗くなってきたからもう帰るわぁ。じゃあまたな、ガキ」

チンピラ風のおんちゃんの手をひらひらと振ると、踵を返して再び歩き出し、よたよた階段を降って俺たちの前から去って行った。

『暗くなってきたから』って、あんた小学生かよ？

「朱雀……なんだよ、あの人」

「うむ、まあ心配するな、あやつに手出しはさせぬ。わたしが付いてやるからな」

軽く流したあと、につこり微笑む朱雀はさっきのピリピリした雰囲気さがすっかり消えていた。

って、まてよ？

「『付いていてやる』ってのは、もしかして……」 嫌な予感がするんですが。

「もちろん毎日この学校とやらに付いてきてやる。と言っているのだ！」

朱雀さん、満面の笑みなんです。

それはやめてくれえええ！！

俺の……俺の唯一の楽しい学校生活がっ……！！

朱雀さんのおかげで、たった一つのオアシスが無くなる可能性

大ですが。(うつうつ……ぐすん。

12・なつは6じ、ふゆは5じにかえりましょう。（後書き）

私が子供の頃の標識には「なつは5じ、ふゆは4じ」と書いてありました。

今どきの小学生に聞いてみたら、「なつは6じ、ふゆは5じ」だそうです。（そんなつ）

・・・暗くなったら家に帰りましょう!!

# 13・ハル+

俺は櫻井 春彦。

家では俺に安息は無い。

なぜかとゆくと……

うるさい妹の秋奈と、謎のスパツツ女・朱雀がリビングを占拠し、我が家で気ままに生活しているからだ。

「きやははははっ！」 秋奈め、またテレビ見て爆笑してやがる。  
「あははっごほっ、ごほおっ！」 スパツツ女め、遠慮というものはないのか？ あ、むせた。

俺の安らぎの場が……

しかし！ 家がダメでも学校がある！！  
すげえいい奴らの集まる3・5こそが唯一の安らぎの場。

の、はずだったのに。

ガラッ

「来た来た。おはよーハル！今日は忘れ物してねえだろうな？」

「おす、謙吾。昨日は仕方なかったんだよっ！」

ガラッ

「あっ　おはよー　スザクちゃん」

「うむ。早いな、謙吾殿」

……………

うん……

説明すると、学校に登校する俺＋朱雀。

なぜか学校に付いて行くと行って聞かない朱雀。

彼女に逆らえない俺は、一緒に登校して来たわけです。

俺の……唯一の安らぎの場が……（ぐすん。

まあ、授業中は俺に配慮してくれてるのか、朱雀は一人屋上で時間を潰しているようだ。

休み時間のたびに校舎を歩き回っているみたいだけど。

真っ赤な髪に赤い着物が見たなくても目に入る。



学校中の生徒や教師が、これといって朱雀の存在を気にしていないのが不思議だ。

こんな不審人物を受け入れるとは、みんな、心が広くね？

……俺の心が狭いワケ？

そんな学校生活。

クラスでは、謙吾とリョウが一番仲の良い友達だ。

謙吾は元気がよくて、面倒見が良い。

リョウはクールで表裏のない性格。

2人といると気を遣うこともなく、安心するんだ。

「本当に良い友に出会えてよかったな、ハル」

俺の横でにつこり微笑みながら話しかけるのは 出た。朱雀だ。

「いや、俺たちもこんなかわいいコと会えてよかったよぉ〜スザクちゃん」

「だよな。（ちょっと変わってるけど）かわいいし、羨ましいぜ、ハル」

朱雀にちよつかいかけているのが謙吾。

悪戯っぽい笑みを浮かべ、俺をからかっているのが、リョウ。

はあ。朱雀がいなけりやもつとよかったのにさ。

ハッ！！

うっかり流しちまうところだったぜ。

イヤイヤ、ちょっと3節目前に戻ってくれる？

2人の会話の内容、おかしいって！

謙吾とリヨウはなにも朱雀のことを分かってねえ！

奴がどれだけ暴君であるかを。

奴が常に恐怖政治を行っていることを。

奴がただのかわいい女の子じゃないことを・・・

「ハル、なにか言いたいことでもあるのか？　わたしになにかあるのか？」

朱雀さんは俺が心の中でぶつぶつ呟いていると、ダイレクトに核心を突いてきた。

朱雀さん……あなたは細　数子ですか？

それともサトラレですか？

「イエエ、なんにもナイデス……」（ううつ、ぐずつ、ぐずん。

俺は今日も心の中で涙する。

#### 14・玄武現る・教訓その三

授業が終わり、謙吾たちと別れた後、廊下から不意に足音が鳴り響いた。

それも、ぺたん。ぺたん。と、だらしない足音が。

「玄武か」

朱雀がつぶやく。

俺は足音の響く先を見ると、そこにはどこから現れたのか、例のチンピラ風あんちゃん もとい、玄武が歩いてきた。

「よう、ガキ。と、アカスズメ」

相変わらずの不敵な笑みを浮かべ、玄武が声をかけてくる。

俺の隣にいる朱雀は、なにやらいつも以上にものつそい怖い顔をしているんですが。

やばいって、その顔を謙吾が見たら絶対悲しむよ？

「言ってくれるではないか、山蜥蜴<sup>トカゲ</sup>めが」

朱雀さんがおもむろに、懷から鉄扇を取り出し、俺の前で初めて鉄扇を開いた。

ジャララッ

重々しくて、鉄と鉄が擦れる金属音。

ってか、武器デターーー！！

静かにブチ切れてる？ 朱雀さん、キレてるよね？！

「ああん？ 闘<sup>や</sup>んのか、ドチビ！」

玄武がスイッチが入ったかのように、ドスをきかせた声ですんずん近づいてくるではないか。  
その左手にはよく映画やドラマで見かける黒いブツが。

……うん。どう見ても玄武が持ってるのって……  
銃だな。うん。

……どう見ても銃だよ、アレ。

「ちょっと待ったああああー！！」

この物語にそんな血なまぐさい展開はいらねえよ！  
誰も期待なんてしてないと思うよ？！  
闘ったら、間違いなくどっちかが落命しますよ？

「邪魔をするな、ハル」 朱雀さんが口を尖らせ、キツと俺を睨んだ。

「えゝ久々にストレス発散しようかと思ったのによお」 玄武が腰に手を当てながら俺に不満そうな視線を送る。

どうやら俺が間に割って入ったおかげで、2人のボルテージは一気に下がってしまったようだ。

え、俺が悪いの？

まったく。

殺し合いに発展しそうになったり、あっけなくやる気をなくしたり。

なんなんだよ、こいつらは？

「あのね、朱雀。子供がそうゆう危ないモン持つのよくないと思うぜ？」

「ハル、わたしを馬鹿にするような言葉遣いはするなよ？」

朱雀さんが微笑んで俺を諭す。

その満面の笑顔が、あまりにも不自然なんです。

そんな時、例の鉄扇が再び重たい音を響かせた。

玄武に向けられるはずだったそれは、こともあるうちに……

「分かりました分かりました分かりましたつ、だから開いたままの鉄扇首元に突きつけるのやめてください！！」

俺かよ！！

そんな俺と朱雀のやりとりを見ていた玄武が急に笑い出す。

「アハハハッ！ お前、変なガキだな！ オイ、名前は？」  
「えっ……？ あの、春彦です……」

これ以上変な人と知り合いになりたくないんですけど。変人は朱雀だけで十分なんですけど。

「ハルヒコ、ね……俺は千年王城の玄武だ。まあ、仲良くやっていこうぜ」

玄武は初めてにつこり微笑む。

いやいや、それよりもまた出てきたよ？ 『千年王城の』って。  
何か怪しい組織なのか？

と、まあこれでひとまず朱雀と玄武のいざこざが終わり、ひと段落……

そして、朱雀の教訓三つ目ができました。  
教訓その三【朱雀を「アカスズメ」と呼ぶべからず】

意味は謎だが、そう呼んだら間違いなく命はねえな……うん。

#### 14・玄武現る・教訓その三（後書き）

現在ブログ作りに悪戦苦闘中・・・^^；

落ち着いたらブログの方でも物語を載せようと考え中です（笑）挿  
絵付きにしたいなあ・・・

（後書きなのに全然関係ない話ですいません【汗】）

## 15・エキノコックスに気をつける！

ねむい……

あ、今日は祝日か……

まだ寝てられるじゃん……

昼まで寝てよ……

………

「……うむ。そうゆうわけなのだ」

「ほほう、それは実に有意義ですな」

「まあ、それは建前として本音を言えば彼<sup>か</sup>の少年で暇つぶしをしているのだ」

「やはり何も無いと退屈で仕方ありませんしな」

なんか、気になる内容の話し声が聞こえる……

誰だ？ 一人は誰がしゃべってるか分かる。

あえて言っと、朱雀だ。



もう一人は誰だ？ 全然聞いたことのない声だし。  
しゃべり方がおっさんくさい。  
(まあ朱雀もだけど)

気になるう……

「ハルのやつは勘が鈍いゆえ、すぐには気付かぬな」

！！

やっぱ、俺の悪口だったのかぁ――！

このっ、朱雀めえ……！

ついにカチンときた俺は部屋のドアを勢いよく開け、2階の通路  
で人の悪口を平気でしゃべる朱雀に怒鳴る。

「悪口言いたきゃ、もっと聞こえないように話せええ――！」

座りながら話し込んでいる2人はびっくりしたのか、目を丸くし  
て俺を見上げた。

その光景を見た俺も、目を丸くして2人を見下ろした。

2人を……

2人……？

……いや、1人+1匹？

うん。1人と1匹だね。こりゃ。

「えええええ、な、なに？　なんだよ、そいつー！」

俺はホントにビビッた。

本当に<sup>マジ</sup>ビビッた。

朱雀の隣に座ってたのは　キツネだ。（コーン）

うそお！　俺ん家ペット禁止だよ？

いや！　そんな事よりも、エキノコックス移るんじゃないの？！

「馬鹿者、わしゃそんなこ汚くないわい！」　目の前のちよつと薄汚れたキツネが言う。

「あ、スンマセン……」　俺、謝る。

「ハル、この者は稻荷狐の『権兵衛』だ。わたしの茶飲み友達なのだ」　朱雀が話す。

祝日の朝、俺ん家に謎のしゃべるキツネ、『権兵衛』さんが現れたのである……

エキノコックスは大丈夫なんだろうか……？

## 16・どんべえ帰る

俺はもう、朱雀にどんな友達がいようと何も言わねえ。

エイリアンが友達でも、幽霊が友達でも、ネッーが友達でも。  
(ただし家に呼ぶのだけはやめてくれ)

だけど、しゃべるキツネ……って。

動物が言葉を話すって漫画ではベターだよな。

まあ実際ありえねえし。

俺の知ってる限り、言葉を話せるのは人間と鳥くらいだ。  
もしかして、キツネも話せたりして。それを知らなかったの俺だけとか？

キツネ：哺乳綱ネコ目イヌ科、キツネ亜種キツネ属に属する動物の総称である。

(動物大図鑑MAX抜粋)

いやいやいや、やっぱキツネには無理だつて！

取りあえず……会話するか……

「あの、俺ん家に何か用つすか？ えっと、名前なんだっけ……？  
どんべえ？」

「お前さんの脳みそは空っぽか？ わしや権兵衛だ！」

このっ……！ キツネのくせに！

人間よりキツネの方が脳みそチツチエエくせに！！

「どんべえはな、お前に会いに来たのだよ、ハル」

朱雀さん、権兵衛さんの名前間違ってるから。

「俺に？」

「さよう、朱雀殿が見込んだ人間がいます、風の噂で聞きつけてな」

朱雀って、なんか偉いやつなのか？

「噂どおり、面白い人間じゃ」 権兵衛さんは器用に前足を使って  
アゴをさすっている。

「ふふっ。どんべえも興味がわいたか」 いやいや、朱雀さん普通  
に間違ってるってば。

「さて、噂の人間を拝んだことだし、わしや社やしろに戻るとするわい」

権兵衛さんは脇に置いてあった木の棒を掴み、杖の代わりに使っ  
て2本の足で立ち上がった。

そう、2本の足で……

え？

立てんのオ？！

「どんべえ、遠いところご苦労だったな」 朱雀さん、もう言つてやんねえよ？

「なんの、邪魔をしたのはわしのほうじゃ。土産を置いてゆくから、皆で食べなされ」

権兵衛さんが唐草模様の風呂敷を脇から取り、俺に手渡してきた。

「御二方、ではまた」

そう言つて、木の棒にくつついていた1枚の葉を額に乗せると、昔話の化け狐のように

ボンッ！

という音と共に、権兵衛さんは忽然と姿を消した。

んなバカな！！

「ハル、どんべえがくれた土産が美味そうか見てみたい」

俺の持っている風呂敷を見つめながら朱雀が催促した。

「やっぱ、キツネのプレゼント……つつたら、いなり寿司とかかな

あ？」

ちよつと重いし、たくさん入ってそうだな。  
お土産まで持つてくるなんて、権兵衛さんいいキツネ<sup>やつ</sup>じゃねえか。

風呂敷を床に置き、結び目をほどき、期待を込めて風呂敷を広げた。

ハラリ。

「ンギヤ――――――――――」

「――――――――――」

「あぁっ馬鹿者！ 全部逃げてしまったではないか！ ハル、倒れてないで早く捕まえろ！ せっかくのご馳走がもつたいないであろう」

（チュー、チュー！）

説明すると……風呂敷の中身は……い、いなり寿司なんかじゃなかった。

「皆で食べる」と置いていったお土産は

生きたネズミ……！

風呂敷から逃げ出すネズミの大群は、マンションの10階を、駆

け……ま、まわ・る

（バタッ）

## 16・どんべえ帰る（後書き）

前に家の中でネズミを見つけました。

逃げたハムスターかと思って捕まえようとしたら、しっぽがっ…！

！（絶叫）



## 17・ミッション・インポッシブル

キン コーン

カーン コーン

「次体育か……無理だっ、眠いし体動かないし」

権兵衛さんのせいであの後は大変だった。

分散して逃げまどうネズミたちを捕まえるのに夜中までかったんだよ！

「馬鹿者！ 男子たるものの弱音を吐くなど女々しいぞ！」

休み時間に現れた朱雀。

お前に言われたかねえよ！！

昨日、俺が気絶した後の出来事だ。（分からなかったら16に戻って確認ヨロシク）

朱雀が俺の頬をひっぱたいて無理やり起こす。

ネズミを捕まえるよう指図。

俺はたった一人でミッション開始。

うしろで見ていたはずの朱雀がいない。

必死に戦っている俺をよそに、朱雀はテレビを見て爆笑中。

もうやりたくねえ、自分の部屋に帰ろう。

そんな時「ピーン」と何かを感じる。

それは殺気。

もちろん、ネズミ捕り続行。  
深夜2時、無事ミッション終了。

「だめだつ、やっぱ俺帰って寝るわ」

鞆をむんず。と掴み、教室を出ようとしたとき、謙吾とリョウが自分達も帰ると言い出した。

みんなでサボればこわくない！　ってことだ。

朱雀は学校に通う意味自分分かってないし、唯一の弱点を知ってるから言いくるめるのは簡単なんだよな。

「今はメンタル的にキツいんだよ、だから今日はもう帰ろうぜ、朱雀」

「め、メ、めん・タロ……？　むぐ……それは……家に帰るのは当然のことだな」

朱雀が冷や汗をかきながらうなずく。

ぶつ。ざまあみる。

分かってねえのバレバレですよ、朱雀さん！

「じゃあ、みんなで帰ろう」

なぜか謙吾が一人はしゃぐ。

まあ、謙吾はただ単に朱雀と一緒に帰れるから嬉しいんだろうけど。

帰り道、バス停までの距離を歩く俺と、朱雀と、謙吾と、リョウ。

「ねえねえ、スザクちゃんは誕生日いつ？」 謙吾、顔がニヤけて変だぞ。

「誕生日？ わたしにそんなものはない」 ためらいなくサクツと答えるね。

「世の中にはいつ・どこで生まれたのか分かんねえ奴だっているさ」  
一瞬止まりかけた会話をリョウがサラリとまとめる。ってゆうか、  
例えが重くね？

「ちえつ。じゃあ、ハルは？」 謙吾、俺はおまけ的扱いですか？  
「俺？ …… 明日なんだよね」

言った後、謙吾とリョウは目を輝かせて言う。  
明日、祝いにいくからと。

その言葉に心底嬉しくなって、自然と笑みがこぼれる……が。  
次の瞬間、浮かべた笑みが苦いものへと変わっていく。

明日は俺の誕生日。

誕生日だからといって、毎年特別な事はしていない。

だが、今年は違う！

穏やかな誕生日になるとは思えねえ……  
なぜなら。

この迷惑スパツ女、朱雀がいるから、だ！

……  
ああ、嫌な予感がする

## 17・ミッション・インポッシブル（後書き）

映画の『ミッション・インポッシブル』ではありません。『ミッション・インポッシブル』です。

『…ではなくて、』…です！特に意味はありません！…スミマセン…；

## 18・はじまる祝典（前書き）

いつもより若干長めです…【汗

## 18・はじまる祝典

ついに今日という日がやって来た。

櫻井 春彦（14） （15）

そう。今日は俺の誕生日なのだ……

「ただいまー」

「只今戻ったぞ」

俺は玄関で靴を脱ぎ捨てたまま、リビングへ進む。

朱雀はなぜか自分の草履を懷にしまつて、リビングへあがる。

草履を懷につて…… あんたは木下藤吉郎（かの有名な秀吉）さん  
ですか？

「はるちゃん、朱雀ちゃんおかえりなさい。早かったのねえ」

キッチンに向かったまま、母が弾んだ声で返事を返してきた。

あ、いい匂いがする。

「今日は午前授業だったんだ、学校が早く終ってラッキーだったぜ」  
「今日は午前で皆出て行くよう言われたのだ。なぜだ！ わたしは  
給食が食べたかったのにつ……！」

俺をよそに、一人悔しそうに顔をしかめる朱雀。

ん、最後に言い放った言葉はなんだ？

根本的に、学校の生徒じゃない朱雀さんは給食食べれませんよ？

「朱雀ちゃん、機嫌をなおして！ 給食じゃないけど、今日はご馳走を用意するから」

母が包丁をプラプラ振り回しながら笑顔で振り向く。

「おお 奥方が腕を振るうわけだな！」

「ヒイツ！ 母さん、分かったから包丁持ったまま腕を振るなあああ！」

サククリ包丁が飛んできそうな勢いなのですが！

俺の真摯な叫びをよそに、そのまま母は上機嫌で再びキッチンと向き合う。

も、いいや……

せっかく早く帰ってこれたんだし、一人でぐーたらしよう……

午前授業ついていいなあ、のんびりできる時間があるし。

うるさい妹の秋奈は、新しくできた友達と遊びに行っているみたいだし。

「暇そうだな、ハル」



ソファーにひっくり返ってダレていた俺に、朱雀が覗き込んだ。  
た。

び、びっくりしたあ。

つつか……

安らぎのひとときを「暇」扱いですか？

「暇じゃねえよ、安らぎを追い求めるのに俺は忙しいの」

ひっくり返ったまま、何か企んでいそうな顔の朱雀を気にせず目を瞑る。

「ふふつ。遠慮は要らぬぞ、今日はハルの『誕生日』とやらではないか」

……えっ？ 遠慮してないよ？

「そうだけど。誕生日だからって特別な事なくていいからなっ！」

俺はソファーからガバツと起き上がり、含み笑いをする朱雀に先手を打って、釘を刺す。

絶対何か企んでやがるな、こいつ。

「……わ、わたしの善意をつ……蹂躪じゅうりょんするつもりか？！」

はっ！！

し、しまったああ！！

顔を紅潮させ、ブルブル震えながら手にぎゅっと例の鉄扇を握り

締める朱雀さん。

今日は最強に怒ってるっ！！

やばい！

やばいやばい！

俗に言う「やばす」！！

恥もへつたくれもねえ。

彼女の怒りを静めなければ、俺の命はねえ。

とにかく横文字だ！ なんでもいいから横文字を使え、俺！！

「ごめんなさい、ごめんなさい！ そうですっ、アレです。今日は俺のバースデーです！ メモリアルです！！ わぁウレシイナァ！」

何か違う気がするけど、そんな小せえコト構ってられるか！

俺は体裁より、命をとる！！

額にびっしり汗を浮かせて笑顔を作る俺は、朱雀の顔色をそーつと伺った。

「……………わたしの好意を……………！！」

未だ小さな肩を小刻みに震わせ、明らかにこめかみ付近に浮き上がる青筋。

そんなんっ……………！ 横文字が効かない？！

朱雀さんの頭から湯気がっ。（出てるように見える！）

俺、ピンチ!!

19・正直の頭(こづべ)に神宿る(前書き)

今回の19は真面目くさい話になっています。  
ご了承ください(ペコリ)

## 19・正直の頭（こづべ）に神宿る

俺はどうやら神の逆鱗に触れてしまったようだ。

神話や昔話でも、神の怒りを買った者の末路は 無残なもんだ。

俺はまさに神の怒りに触れてしまった。

脂汗が滝のように止めどなく流れ落ちる。

どうしようっ

唯一の手段・横文字は効果無し。  
予想外だ！

目の前で憤怒のオーラを放っている（ように見える）赤い髪のス  
ーパ サイヤ人。  
このまま猿にでも変化しそうな勢いだ。

だめだっ

全然解決策が思い浮かばねえ。

……どうする。

……どうする？！

……正直に謝るしか、ないな、こりゃ……

俺は両手を顔の前に合わせて、怒りの形相でずんずん近づいてくる朱雀さんに、謝った。

たぶん、はじめて本心から、謝った。

はじめて、朱雀に本心を言った。

「ごめん！……ごめん朱雀。ちよつと言いすぎ……た、かもしれない。朱雀が俺のために何かしてくれようとしてたなら、ひどい事言っちまったし、その……ごめん」

きつと俺は今、情けない顔をしてるんだろうな。

言い終えて朱雀の表情をうかがうべくそろりと顔を上げた。  
どうやらまだ顔が怒ってる。

やっぱ、こんな謝り方じゃダメかぁー……。

金色の目で俺を睨みつけながら、じつと佇む朱雀。  
たたず

長い長い沈黙を破って、やっと一言彼女が呟いた。

「……うむ。なら許す」

え？

アッサリ？

こんなアッサリ？！

朱雀は少しうつむいて難しい顔をした後、一人玄関へ向かい、草履の紐を結びどこかへ出かけるようだ。

「では、ゆくぞハル！」

朱雀は先ほどとうって変わって、明るい声で俺に促した。

ちょっと待て、どこへ？！

つかさっきの怒りはどこへ？！

「おい朱雀、なんで俺が」

俺と一緒に行かなきゃなんねえんだよ。

と、言おうと思った矢先。

朱雀は玄関のドアを開けながら決定打を一言。

「さっさと来ぬか。ぽろつと（首を）落とされたくはないであろう？」

につこり微笑む彼女の笑顔は最高に可愛い。

冷徹なまでに辛辣な言葉を発する口はまさに悪魔。

俺は自称神と名乗る、スパッツを履いた悪魔に呪われているのだ  
ろっか？



## 19・正直の頭(こうべ)に神宿る(後書き)

正直の頭に神宿る：正直な人は神様が見守っていてくれる。

3より)

(ことわざ辞典 シリーズ1

人間正直にならなきゃいけないですね…

## 20・ハルの誕生日（人力車現る）（前書き）

いつもよりほんの少し長めです、多めに見てやってください^^;

## 20・ハルの誕生日（人力車現る）

朱雀は俺の手を引き、マンションの入り口で立ち止まった。  
昼下がりのこちら一帯は車もさほど走っていない、閑静なまち並み。

朱雀がおもむろに、二本の指を使って口笛を鳴らす。

ピュイツ！

ん？ 犬でも呼ぶのか？

広いマンションの敷地には更に広い駐車場が備え付けられている。  
そこから、俺たちの方へ何かが向かってくるではないか。

犬？ ではねえな。

車でも、自転車でもない。

俺は超低速で向かってくるそれを見て、バカみたいに口を開けっ放しにしながら呆然と立ち尽くす……

「ねえ朱雀。人力車みたいなのが来たんだけど」

棒読みで質問する俺。

離れた距離からどんどん近づいてくる、人力車？  
人力車なんて、さすが京都……？

「あれは、彦左衛門だ」

すっぱり答える朱雀さん。  
って、知り合いかよ！

俺たちの前にやっと着いた真つ赤な人力車。  
それを轢くのは朱雀の友達（？）の彦左衛門さん。

「やあ朱雀殿、お久しぶりですなあ」

「うむ、達者であつたか？ 彦左衛門」

笑顔で挨拶を交わす2人は、どうやら久々の再会のような。

「おや、はじめまして坊ちゃん」

彦左衛門さんは丁寧にも深々と俺に挨拶してくれた。  
朱雀のダチってるくなのがいねえから、ちよつと感動。

「あ、はじめまして……。俺、櫻井 春ひ…… ん？」

ちよつと待て、あまりにも礼儀のある人だから見落としていたが

……

「あれ？ この頭にくつついてる折れた矢みたいなのは？」

まじまじと彼の頭を見つめてふと疑問が湧いたのだ。

俺は彦左衛門さんの頭の上に、弓道の矢がくつついているのがついた。

それも刺さっているように見えるんですが？

「わはは、坊ちゃんは目の付け所がよろしいなあ！」 彦左衛門さん、豪快に笑う。

「ハルはなかなかのもんであろう？ 宜しく頼むぞ、彦左衛門！」 朱雀さん、ニヤリと笑う。

「あ、はは……は……」 俺、2人に合わせて笑ってみる。

「つて、なんじゃそらー！ どう見てもこのおっさん、落ち武者に見えるんですけど！」

「おっ、ハル坊は鋭いのお。それとも拙者死んでから有名になったか？ わはははは！」

説明しよう。

俺の目の前でつかい声で笑っている40代（だと思う）のおっさん、彦左衛門さん。

赤の布地で統一され、黒いフォルムが重厚感を醸し出す人力車を所有。

よれよれの着物に、ヘアスタイルはおそらく時代の先駆け。

頭頂は完全に剃られ、サイドから無造作につくられたロングヘアの黒髪が肩まで伸びる。

その、毛の無い頭部に刺さりこんでいる 矢。

矢が……

矢がっ……

ぎゃああああああ！ 頭に矢がブツ刺さってる――？！！

## 21・ハルの誕生日（彦左衛門現る）

俺の顎が勝手に震えだして、ガチガチうるさいんですが。  
ついに顎が壊れたか？

「こやつは落ち武者の彦左衛門だ」

あえて丁寧に説明してくれる朱雀さん。落ち武者のおっさんはハ  
ニカミながら頷いた。

頭から血の気が猛烈な勢いで失せていくのが分かる。  
だって、目の前のおっさんは間違いなく……  
お、おおお、おばっ、おばっ……

ドタッ！

「ハル、なぜ泡を噴いて卒倒しているのだ？ さては新手の芸だな  
？」

「あぁっ、ハル坊が白目を剥いている?! 何か怖いものを見  
た顔だ……しっかりするんじゃあ、ハル坊!!」

ガタッ      ガタン

わずかな振動と、風が覚醒を促す。

俺はうつとゆつくりと目を開けた。

俺……今まで気絶してたのか？

「ハル、目が覚めたようだな」

安堵に似たやわらかな笑みを浮かべた朱雀を見て、俺の心臓が少しだけ高鳴ってしまった。

不覚だっ！

俺はふと、自分が乗り物に乗って移動していることに気付いた。時代劇に出てきそうなまち並、茶屋、たくさんの観光客らしき人

「どこだ……ここ？」

乗り物のスペースはやけに狭く、椅子には真っ赤な布、そして目の前にはその乗り物を轢ひいている人物がいる。

「わっはっはあ！ ハル坊は実に面白い、皆が興味を抱くのも納得じゃー！」

笑い声の豪快な落ち武者、彦左衛門さん……だ。

とゆうことは、この乗り物は人力車で間違いねえな。うん。

「ふふっ その通り、ハルは面白人間なのだ」

スパッツ女め、お前に言われたくはねーよ。



けど、さっきまではこの落ち武者のおっさんが本気で怖かったのに

笑った声を聞いてると今は全然怖くない。

この振動、この風の匂い、朱雀のやわらかい声と彦左衛門さんの明るい声。

悪い気分じゃあない。

なんだろう、不思議と居心地が、良いんだ。

「ふふっ、なにあれえ〜」

「コスプレかなあ？ うけるう〜」

俺が夢心地でここを暖めていた時、すぐ近くから気になる会話が聞こえてきた。

超低速で走る人力車は人より速く、チャリより遅い。

観光客らしき女の人たちが、俺たちの方を見ながらクスクス笑っているのだが……なんで？

笑っている目線の先をたどってみると、そこには若いお姉さんたちに満面の笑顔で手を振る彦左衛門さんの姿。

あんた何やってんだああ！！

「わははは！ どうも別嬪の女子おなを見るとつい」

そう言っ て顔を赤らめたおっさん。ホントにお化けなのか？

「彦左衛門、では予定通り頼むぞ」

朱雀はなにやら俺に分からないように、彦左衛門さんにアイコンタクトを送っている。

彼は拳を握り、親指だけを立ててビシッとポーズをとって合図する。

すんげえ怪しくて不安になるんですが……！

さっきまでの暖かい気持ちはどこへいったのか？

俺の誕生日は、予想通り残念な結果に終りそうだ……（ぐすん。

## 21・ハルの誕生日（彦左衛門現る）（後書き）

21は書き直しの連続でした…うう、まだ納得いかないかも…また修正かけるかもしれません【汗

## 22・ハルの誕生日（びちょぬれ登場）（前書き）

22はちよつと長いので、時間のある時にご覧になってください。

## 22・ハルの誕生日（びちよぬれ登場）

「朱雀殿、ハル坊、着きましたぞ！」

彦左衛門さんは観光地から少し離れた裏街道で人力車を停める。  
俺たちの目の前には【甘味処 びちよぬれ庵】という、最悪のネーミングを持つ店が佇んでいるのだ。

「ハルにどうしてもこの『びちよぬれぜんざい』を食べさせてやりたかったのだ」

朱雀からの思いもよらぬ、（かなり）嬉しい言葉に俺は図らずも感動。

「朱雀……！」

につこり微笑む朱雀に俺のこころは再び暖かい気持ちでいっぱいになった。

効果音を付けるなら（パアアア）かな、バックには乙女チックな花でもいいな。

いつもいつも迷惑と厄介事ばかりの朱雀。  
だけど、ちゃんと俺の事、考えててくれてたんだ！！

俺は朱雀と彦左衛門さんに腕を引っ張られて店内へ入った。

「いらっしゃいませえ、あら、スザクはんやない、今日も来てく

れはったんですね」

少し甲高い声で、和服にエプロンを着用した素朴感溢れる店員が、朱雀を見つけて挨拶してきた。

店員さんとすでに馴染みなのか、やるな……。

「うむ。びちよぬれ三ツで頼むぞ」

ビシッと三本指を立てて、『3つくれ』とアピールする朱雀。

ビシッと親指を立てて、『了解』とコクコクうなづく店員さん。

ビシッと……って、流行ってんの？

和風の内装は落ち着いた雰囲気で、朱雀が気に入ってるのも分かる。

観光地から少し外れてるから、人でごった返してるわけでもないし。

「お待ちどうさまですうゝ、『びちよぬれぜんざい』 3つお持ちしましたゝ」

陶器の皿に乗った若草色の器。なかなか小洒落ている。

コトン、とテーブルに置かれたネーミングセンス最悪のぜんざい。だけど、見た目と味は最高だ！

最高級の小豆であろう、黒い煌めきはさながらブラックダイヤモンド！

白玉のプリプリ感とほんのりした甘みはまさに、味のIT革命やゝ！

って、何やってんだ、俺……。

「今日も申し分ないぜんざいであつたぞ」

「ご馳走様でござる」

「美味かつたです、ごちそうさまでした」

俺はそのまま店を出ようとしたとき、店員さんと朱雀がなにやら話し込んでいる。

財布でも忘れたのか？

「今日も御代はツケでよろしいですか？」

ん、今店員さんツケって言ったよな？

「うむ！」

今日も。っていつつもツケで食ってるわけ？

「あ、今日は金があるのであつた！」

朱雀はひらめいたようにポンと手を叩き、こっちを振り向いた。

……え。

「お客はん、今までのツケた分の請求書です、たのんます」

にっこり微笑み、俺に一枚の紙を差し出す店員さん。

……ええええええっ？！

「ありがとうございますっ！またおこしやすう」

【甘味処 びちよぬれ庵】を後にした人力車一行。  
お気に入りのおぜんざいを食って、上機嫌の朱雀さん。  
お化けのくせに満腹満腹、といった表情のおっさん。

俺だけ大ダメージを喰らったんですが……。

……もう二度と朱雀となんて来るもんかー！（うつっ、ぐずん。

P S . こいつは俺の誕生日だから。ってわけじゃなくて、

ただ自分がぜんざいを食いたかったから、彦左衛門さんと呼んでまでここへ来たのだう。

このスパツ女めええええ！！（うつ、うつ、うわああん！



## 22・ハルの誕生日（びちょぬれ登場）（後書き）

個人的にはぜんざいよりあんみつ派です！

## 23・おわる祝典

びちよぬれ庵を後にした俺たち。

人力車は道行く人々からクスクス笑われながら、超低速で歴史のまちを走る。

夕暮れは刻々と迫っていた。

「朱雀殿、まもなく辻ですぞ」彦左衛門さんが謎の発言、『辻』って何のことだ？

「うむ。もう集まっている頃であろう」朱雀は額に手を当てて、遠くを見るポーズを取る。

ちょうど2本の道路が交差する十字路、つまりそれが『辻』だそうだ。

人力車が減速しだし、辻に近づいていることが俺にも分かった。そして、俺の体から血の気が失せていくのも分かった。

さして交通量の多くない十字路。

そこにたくさんの人が群がっているのが肉眼でも見えたのだ。

「おおっ やはりもう着いていたか！ 奴らハルの誕生日を祝いに駆けつけて来たのだ」

朱雀が人力車の上で立ち上がり、集まった大勢の人々に手を大きく振る。

俺は焦点が定まらず、呆然としたまま眼前のありえない光景に鳥

肌がわきあがった。

ゾッ……

「すざぐどのおおゝ！」

距離およそ50M、辻では俺たちに手を振りながら叫ぶ人々の姿。

いや、

人々では、ない。

「いぐぞおゝみなのものゝ、ぜえゝのゝゝ」

「はるぼっちゃん」おめでどうございますゝ！」

一斉に声を揃えて俺への祝いの言葉を叫ぶ彼ら。

その声はまるで地獄から響く怖ろしい・呪われた響きだ。

彼らの姿は日本のホラー映画で活躍できそうなくらい、強烈。

ボロボロの兜を被り、身につけた鎧はところどころ欠けている。

戦国時代の衣装を身に纏った彼ら。

骨と皮だけ、あるいはすでに白骨のみになった姿……

幽霊の集団が俺を祝福してる！！

「ぎいやあああああああああ！！」

俺は再び情けない叫び声を上げ、たぶん気絶した。

『たぶん』ってのはその後のことが記憶にないからだ。

体が少し浮遊感を感じる。

チン

と、エレベーターの音で俺は目を覚ました。

「気がついたか、ハル」

「おおっ、大丈夫かね？ ハル坊」

どうやら朱雀と彦左衛門さんに抱えられ、俺は我が家に帰ってきたみたいだ。

ううっ。やっと開放されたぁ……！

幾つもの恐怖体験を経て、すっかり夜になっちまったがやっと戻ってきた！

やっぱり俺の安息の場所は我が家だ！

玄関のドアをガチャリと開けると、俺はその場に固まる。

……この某TV番組、5男4女大家族的な玄関はなんだ？

スニーカーにサンダル、ローファーに革靴、ブーツetc……

所狭しと靴が並べられ、俺の靴が置けないんだけど。

リビングからは楽しげな笑い声と、料理の良い匂い。  
そおーっとドアノブを回し、リビングに入る俺。

「「お帰りー！」」

料理を囲んで見覚えのある人物が勢揃い。

父、母、妹・秋奈、ダチ・謙吾とリヨウ、加えてなぜか玄武、さらにどんべえさん？

間違った、権兵衛さん。

頭が真っ白になり、その場に立ち尽くしていると、後から朱雀の弾んだ声が聞こえた。

「ふふっ、ハルは幸せ者だな！」

……今まで生きていて、最高の誕生日になりましたヨ……ウレシイナー……ぐずん。

## 23・おわる祝典（後書き）

みんなから「おめでとう」「って言われると幸せだ」

## 24・ハル、デパートへ行く

人生最悪の誕生日を乗り切った(?)俺、櫻井 春彦。

今日はめんどくせえ6時間授業をサボって、四越デパートへ向かっている。

PM1:00

四越デパート経由、バス車内。

「マジだつてえゝ、限定モデルだぜ? 憧れのバツシュの限・定・モ・デ・ル!」

鼻息荒く、興奮気味の謙吾。

限定モデルのバツシュ欲しさに授業を平気でサボる奴だ。

「俺、謙吾のそつゆう無駄にエネルギー発揮できるとこ、ソンケーしちゃうわ」

呆れた顔で、尚且つ棒読み発言を繰り出すのはリョウ。

お前のそのシニールさを俺は尊敬するけど?

そう、お馴染みのメンツでサボってます。

朱雀さんはいませんよ。

なにせあのスパッツ女、四越デパートへ行くって言うと、「あの地に踏み入ってはならぬ！」の、一点張り。青龍がどうか、領地がどうか。

そんなわけで、具合が悪いから保健室でスリーピングしているとペラこいたわけだ。

朱雀は必要以上にコクコク頷き、簡単に俺から離れてくれた。

どこへ行くにもくつついて来る厄介な朱雀。

だが！

やっとなんは自由だア！！

P M 1 : 3 0

四越デパート前へ〜四越デパート前へ〜お降りの方は停車してからお立ち下さい

バスのアナウンスに従って、俺たちはデパート前の停留所降りた。どどん、とそびえ立つ立派なデパート。

以前俺がたどり着けなかった場所だ。

「ひゃっほ〜 早いところ展示場に行こうぜ〜売り切れちゃうよ〜」

謙吾に先導され、俺とリョウはちらちらデパート入り口へ向かった。



人の多さはやっぱり東京とは違うな。

まちの中心地だけど、そこまで人であふれているわけじゃない。

中へ入ると、明るい照明に白い内装、1階の化粧品売り場から香る香水の匂い。

うつとりした顔で、一人フロアで佇んでいると、前を歩いていたはずの謙吾がいねえ……

あれ？

リヨウもいねえ……

あれ……？ 俺、置いてけぼり？

## 24・ハル、デパートへ行く（後書き）

えー、このサイト様の公式ブログ・「小説家になろう？秘密基地」の、新イラストコーナーにイラストのつけてみました（笑）  
どんべえさんです（笑）

## 25・ハル、迷子(?)になる

一人呆然とフロアに佇たたずんでいると、ビシッとスーツを着こなした、いかにも青年実業家といった風貌のお兄さんが俺の目の前にやって来た。

ワックスで軽く流した黒髪、整った綺麗な顔立ち、ダークグレーのスーツにライトブルーのYシャツ、ネクタイはグレーのストライプ。

どうみても20代半ばだな。

「お客様、どうかなさいましたか？」

にっこり微笑む青年実業家。

あ、もしかして俺、迷子とされているのだろうか？

「い、いえ……友達とはぐれただけです、から……」

取りあえず1階のフロアから離れよう！

迷子だと思われて声を掛けられるなんて、俺は小学生かよ。

しかし、俺の返事を聞いた青年実業家は、くわつと表情を変え、側にいた秘書らしき女性に大声をあげた。

彼は命令口調で秘書を指差し、先ほどの爽やかなイメージを思い

つきり崩してくれたのだ。

「緊急事態だっ！！ 至急インフォメーションに連絡し、迷子のアナウンスを流したまえっ！」

エッ？！

待て待て待て。

迷子のアナウンスって？

それはちよつと待てええええ！！

俺は四越デパートで買い物を楽しむ客を気にせず、大声を張り上げた。

「大丈夫ですからあ！ マジで平気ですからあっ！ ウグイス嬢の美声を迷子アナウンスで発揮させないでくださいっ！」

青年実業家のピシツと整ったスーツをわし掴みにして訴える。

「そつか……それは残念だ……」

青年実業家は冷静さを取り戻し、ぽつりと呟いた。  
なんで残念そうな表情すんだよ？

「ボク、社長から手を離しなさい」

側にいた秘書が俺を睨みつけながら語尾を強めて言い放った。

「つか、『ボク』って俺の事かよ。

つか、この青年、社長?!

俺が握ってしわになったスーツを直すように、下襟を何度か引く張る社長。

再び爽やかな笑顔を俺に向けて一言。

「また何かあったら、いつでも遠慮なさらず声を掛けて下さいね」

俺はその王子的オーラに萎縮して小さく頷いた。

初めて会うタイプだ……

爽やかすぎる……!

秘書と共にエレベーターに乗って去っていく若社長の姿を見届け、俺は1階フロアで突っ立ったままだった。

後ろの化粧品売り場から黄色い声がヒソヒソ聞こえてきた。

「きゃあ〜やつぱりステキですね、社長」

「あの迷いのない決断力、リーダーシップ、そしてあのイケメンっぷり」

「どう見ても王子ですよねぇ、カッコイイなあ、青龍社長」

女性従業員に大人気だな、オイ。

……って。

あれ？

なんか聞いたことのある単語が……

青龍社長、って言ったよね？

あれ？

前にもどこかで『青龍』って聞いたような……？

まあいつか。

それよりも謙吾とリョウがいるであろう、バッシュの展示場へ行こうかな。

P M 2 : 1 5

俺は一人エスカレーターに乗って5階の展示会場へ向かった。

## 25・ハル、迷子(?)になる(後書き)

昔、デパートで迷子になりました…

親とはぐれ、自力で出口を見つけて生還しましたが。  
迷子アナウンスを流された経験はありませんので！

## 26 デパートジャック

5階展示会場へ向かう途中、お知らせの案内がデパート内に放送される。

### ピンポンパンポーン

館内でお買い物をお楽しみの皆さま、本日は当店へお越しください、誠にありがとうございます

ウグイス嬢のやんわりとした、綺麗な声が全フロアに響いている。誰一人この案内放送に注意して聞くはずがない。

俺は3階へ昇るエスカレーターでただぼんやりとそのアナウンスを聞き流していた。

アナウンスはさらに続く。

只今、5階特別展示場にて、限定品や名産品を集めた、スプリングバーゲンを……

そんな時だった。  
事件が起こったのは。

……キヤアアアアッ



天井付近のスピーカーから、恐怖に満ちたウグイス嬢の叫び声が聞こえた！

なに？！

悲鳴が聞こえ、すぐにマイクが切られた。館内は騒然となる。

これはもしか、事件ってやつじゃねえか？

もしかして、デパートジャックってやつか？

3階で心臓をバクつかせながら、俺は頭をフルに回転させ、状況を必死に飲み込もうとした。

……だめだつ、全然頭が働かねえ。

……いつも頭、使ってないからかな……

そんな時、上の階から怒声が響いてきた。

「緊急配備だ！ 従業員の命が最優先だ、僕の指示に従って行動したまえ！」

例の若社長、青龍さんがエスカレーターを駆け下りてくる。

どうやら想像以上に凶悪な事件のようだぞ。

1階のインフォメーションセンターへ走る青龍さんの後をこっそりついて行く俺。

非日常的な出来事にちよつとワクワク。

尾行つぽく後をつける。

やべえ〜ちよつと楽しい！（スイマセン）

そんな事をしてると、インフォメーションセンターの真横にやって来た俺たち。

（いや、俺は社長達に見つからないように隠れてるんだけど）

受付カウンターから何者かの姿がチラツと見えた。

社長に付いてきた従業員達は恐怖で足がすくんだ状態らしい。

そんな時、一人立ち上がったのは

「僕の大切な従業員に乱暴は断じて許さんッ！ 己の暗愚さあんぐを恥じるがよい！！」

こめかみに青筋を浮かばせ、ハンパない剣幕で、ウグイス嬢を襲ったと思われる犯人にまくし立てる若社長。

姿の見えない犯人にビシッ！ と指差し、腰に手を当てた、時代遅れのかなりダッセエポーズをとっている。

先ほどの爽やかなイメージは……？

王子の品格はどこへ……？

シン。と静まり返った1階のインフォメーションセンター付近。まるで墓場の如く、不気味なまでの静寂だ。

と、受付カウンターからひょっこり顔を出す者がいた。

「ん、その声……青龍ではないか。何をしているのだ？」

スットンキョウな声で目を瞬かせている人物の顔は、毎日見ている。

朱雀じゃねえかあああ！

## 27・青龍現る

1階インフォメーションセンターの側に置かれた、ドラゴン風のオブジェの陰で身を潜めていた俺。

事件の始まりから今現在に至るまで、バッチリ見てしまった。

デパートジャックの犯人は

朱雀じゃーん……

静まり返ったフロアでは、受付カウンターからフツーに顔を出した朱雀を除いて、みんな目が点状態。

誰かがこの状況を打開しなきゃ事が進まねえな。  
はあ……俺がいくかあ……

やりきれない想いで、のろのろオブジェから顔を出す。  
ため息を一つついたあと、受付カウンターで陣取る犯人に視線を走らせた。

「朱雀、なに、やってるんだ……？」

声には落胆と共に、きつとやるせなさがにじみ出ていたと思う。

朱雀は急にオブジェから出現した俺に驚いたのか、無言で目を何度が瞬かせる。

ポーズをカッコ良く（俺から見ればカッコ良くはないが）キメていた社長が、ゆっくり振り向く。

「ハルではないか、無事であつたようだな！」

朱雀が無邪気に笑いながら、悪びれもなく発言。

カウンターの陰になって見えなかったが、目を凝らすとそこには朱雀に鉄扇を突きつけられ、恐怖で身動きできないウグイス嬢の姿があつた。

さっきの叫び声は、これかっ！

「くっ……（くそスパツツ女めっ）受付嬢から離れて説明してください、朱雀さん……！」

俺は朱雀さんが逆上しないよう、あらゆる葛藤に耐えて問いただけだ。

奥歯がギリギリ音を立てているが、それも耐え忍んだ。

「何を言う、青龍がハルを連れ去つたのでわたしがわざわざ出向いたのだ！ この娘たちにはハルの監禁場所を尋ねただけだぞ？」

えええ このコ、話作ってるうー！

俺が一人打ちひしがれ、魂を抜かれたようにその場に固まっていたと、爽やか且つ冷静な声がフロアに響いたのだ。

「朱雀……君、何か勘違いしてるみたいだけど、『ハル』とやら、僕は知らないけど？」

腕を組み、首をかしげるのは四越デパート社長・青龍さん。  
その言葉に少しムツとした顔をみせた朱雀。

「そんな事はない！ ハルが学校から消え去り、気配を辿ってきたらそなたの領地にいたのだ。つまり、青龍が監禁したと同じ事！」

腰に手を当て、唇を尖らせて言い放つ朱雀に、再び青龍さんは目を点にしたまま固まる。

偉そうに胸を張って、無理やりこじつけやがったよ、このコ。

朱雀、根本がおかしくね？

「あのお……2人は知り合いなんスか？」

俺はカウンターに陣取る朱雀と、カウンターに向かい合う社長を順に見つめた。

「知り合いではない、同属なだけだ」 朱雀が頬をふくらませ、否定する。

「ええ、知り合いですよ。同属ですから」 青龍さん、すっぱり肯定。

2人の意見がかみ合ってねえな。

「君が『ハル』？ 申し遅れました、僕はこの四越グループ社長の青龍です。『千年王城の青龍』と言ったほうが分かりますか？」

とびきりの爽やかスマイルで名刺を手渡す青龍社長。

「ってか、でた……！ 謎の組織『千年王城』。  
もうつつこむのはよそう。」

俺はどんよりした気持ちで名刺を受け取った

## 28・朱雀VS青龍社長（前書き）

あけましておめでとうございます！

今年もよろしく願います【ペコリ

よりによって28は長いので、読む場合は気合を入れて（入れなくてもよいのですが）どうぞ。



## 28・朱雀VS青龍社長

「すげえ……青龍さんてホントに社長なんだ」

俺は渡された名刺をまじまじ見つめながら呟く。

正直、朱雀の知り合いにはロクな奴がいねえ。

チンピラもどきとか、しゃべるキツネとか、落ち武者、sとか。

「ボク、社長を侮辱する発言、聞き捨てならないわね」

性格のキツそうな社長秘書が、俺に見えない圧力をかけてくる。  
いや、この物言いからして性格キツいのは間違いない。

こわっ！

でも青龍さん、従業員から信頼されてるんだなあー。  
世の中にはワンマン社長が溢れかえってるってのに。

「まあまあ、僕は気にしませんから。それよりも朱雀、四神には不可侵という暗黙があるのを忘れてはいませんか？」

青龍さんはいつも通りの爽やかな笑みで朱雀に問う。

けれどその表情からは、ピリピリした何かが空気を伝ってきた。

朱雀はカウンターをヒョイ、と軽く飛び越え青龍さんの前に歩み寄る。

向かい合った2人が互いに睨みあい、その場は一瞬にして緊張が走った。

なんか……空気がやけに冷たくねえか？

「忘れてはおらぬ。だが今日そなたの領地に踏み入ったのは、ハルを迎えに来ただけ。

それで納得がゆかめと言うならば、かかって来るがよい」

先に仕掛けたのは朱雀だった。

今までに見たことのない、挑発的で、不敵な笑みを口元に浮かべた朱雀。

前にも感じたことがある。

背筋がゾツとするような、朱雀に対する 怖れ。

その時、初めて俺は『朱雀』が何者なのか疑問に思ったのだ。

「ふつ。ははは……！ 相変わらずですね、朱雀は」

張り詰めた空気の中、突然明るい笑い声が響く。

少年のような顔で笑う青龍さん。

まるで旧友だけに見せる偽りのない笑み。俺にはそんな風に映った。

え、マジで？

こつゆう展開？

「ふ、あはははは！ そつゆう青龍も変わっておらぬな！ 特に間抜けな顔！ あはは、こほつこふつ」

いつものム力つく笑顔に戻った朱雀。

いやいや、青龍さんはそんな顔してないだろうが。

むしろお前の方が間抜けだと思うが？（むせ込むあたりが）

一気に和んだインフォメーションセンター前。

俺は騒ぎを起こした張本人（本人自覚無し）を連れて、四越デパートを去ることにした。

謙吾とリョウの事はもうどうでもいいや、俺がいなくてもバツシユは買えるだろ。

青龍さんにこれ以上の迷惑はかけられねえしな。

いや、迷惑かけてるのは俺じゃなくて朱雀だけだよ！

「ハルくん、またいつでもお越し下さいね」

青龍社長は最初に会った時と同じ、爽やかな笑顔で俺に手を差し出す。

握手を交わして出口の回転ドアに向かおうとしたとき、思い出したように青龍さんが駆け寄ってきたのだ。

「これをどうぞ」

なぜか差し出された茶封筒を受け取り、別れ際青龍さんと従業員の皆さんに手を振る。

こうして、俺（と朱雀）は四越デパートをあとにした。  
自由の身は超一瞬で散ったんですが。

帰りのバスの中で、先ほど貰った封筒を開けると、そこに入っていたのは、『四越デパート特別商品券』 1万円分。

社長、太っ腹だー！ー！！

しかし、朱雀がいるわけだしもう四越デパートには行けないではないか。

つかー……使い道ねえじゃん。

そんな時、商品券をじつと見つめる朱雀が暴露した。

「ハル、四越百貨店の地下1階にある『和処 もったり』のみたらし団子は絶品なのだ。その商品券があれば……むふふ」

……

あれだけ四越デパートには行くなと言っておきながら、自分ばかりし食いに行ってるわけ？

そのむふふって笑いム力つくんですが。

「ふふつ、心配は要らぬ、ハルが青龍のところへ行く時はわたしも付いて行ってやるからな」

テンションが上がる朱雀に対し、俺のテンションは奈落の底へ落ちていく。

二度と浮上できない気がするよ。

「……どうもな……」

P  
M  
4 : 0  
0

俺、  
一体何しにここまで来たんだか……  
（ぐすっ！

## 29・Cool or Hot?

デパートジャック事件(?)の翌朝。

そんな事件があっても、義務教育中の学生は学校には行かなければ。

仕方なしにリビングへ足を運ぶ俺。

「おはよう、春彦」 挨拶と同時に親父、出勤。

「おはよ、はるちゃん」……ちよ、はるちゃん、はやめてくれ。

「お兄ちゃん今日もひつどい寝癖えーキャハハ」 秋奈、あとで覚えてやがれ……!

「お早う、ハル。む、元気がないようだ?」 いや、朱雀さ

ん絡みですよ。

昨日の疲れは半端ねえ、今日もサボりたい勢いだ。

まあ、そんな事を朱雀が許すはずもなく。

なにせ、学校へ行かなければ大好きな給食が食べれないのだから。

そんなこんなで身支度を済ませた俺は、予定通り秋奈にチョークスリーパーをかまし、ほどなくして玄関へ向かった。泣きながらリビングに駆け込む愚かな妹は放って置いて。

「行ってくるわ……」

「では奥方、行って参ります!」

俺のどんよりした挨拶に続いて、朱雀がウキウキしながら母に挨拶

拶。

ああ、給食を食べに行くだけの朱雀が羨ましいわ。

俺のクラス、3・5は朝夕問わずテンションが高い。教師達にとつては面倒なクラスではあるが、俺にとっては賑やかで楽しいクラスなわけだ。

そんな中、まるで呪われて死を目前にしたような最悪にテンションの低い男がいた。

窓際中ほどの自分の席へ着くと、右隣に座るマブダチ1の謙吾の異変に気付き、声をかける。

「おす、どした謙吾？」

俺より低いテンション　　ってか、人生が終ったようなオーラが出てるけど？

『ずーん』って効果音では表しきれないほど重いわ、こりゃ。

「バッシュを買って、四越から出た後すぐに自動車（ワゴン車）にぶつかって、荷物を全部道路にばら撒いちまって、限定モデルのバッシュがたまたま通ったクレーン車に潰されたんだって」

適切な説明サンキュ、リヨウ。

俺の席、まん前に座るマブダチ2のリヨウは事の真相を包み隠さず語ってくれたのだ。机に突っ伏したまま身じろぎもしない謙吾に、俺とリヨウは呆れが混じった悲哀の眼差しを向けた。

「ぺ、ぺちゃん……こ」

ぼそりと呟く謙吾。

哀れな。

つか、車にひかれたって……なぜ学校に来てるんだ？  
いるべき場所は病院だろ？ 普通は。

「謙吾殿も給食が食べたかったのだ」

俺の心を読んだように、哀愁漂う表情で朱雀が言葉を挟んだ。  
いや、朱雀じゃあるまいし。

「今は干からびてるからそつとしといてやろっぜ」

リョウがポン。と俺の肩に手をかけて謙吾の席から離れる。

あまりにも不憫な謙吾はまあ、ほつといて。

俺は今日一日の平和を祈る。

朱雀はとつと教室を出て行き、昼になるまで学校の中を自由行動。

はあ、たるい。

不意に、前に座っていたリョウはくるりと振り返り、いつになく瞳を輝かせ、切り出した。

その瞳は、好奇心にキラキラ煌めく。



「な、ハル知ってる？ 湖にサメが出たんだってよ！ 市役所とか水族館の人たちが捕まえようとしたらしいんだけど、どっかの川に逃げたんだって」

湖にサメ？！ 川に逃げた？！ てか、サメは海だろ？！

「……物騒だな、ま、俺には」

俺には関係ないことだけど。と言おうとした矢先、リョウが言葉を遮ぎる。

「放課後俺たちで見に行こうぜ！！」

いつもはクールなりョウ。

しかし、ただのクールボーイではないと、今分かったぜ。  
平凡な日常は退屈でツマライ。非日常的な出来事やスリリングが奴の闘志に火をつけるらしい。

「まじでか」

「当然」

俺のすごく、すごく嫌そうにした顔を気にも留めず、リョウは首を大きく縦に振ったのだ。

## 29・Cool or Hot? (後書き)

人は見かけでは判断できない熱いものを持っていると、黒雛は思います！ たぶん…

### 30・サメ捕獲大作戦

「うおおおおおおおおおおお！」

放課後、干からびた謙吾をほったらかしにして、俺とリョウと朱雀は武城<sup>たけしろ</sup>中学校付近の小川に来ていた。

深さ10センチ、幅1メートルの小川でこだまする魂の叫び。  
サメを追い求め、こんな小川で全ての力を如何<sup>いかに</sup>なく発揮しているのは、クラス一のクールな男、リョウ。

「うおおおおおお、どこだぁサメエー！」

浅すぎる小川をバツシャバツシャと突き進む。

ああ、こんなアホな事に全エネルギーを注げるリョウを尊敬するなあ、俺。

そんなリョウを遠い目で見つめる俺は、間違いなく冷たいである。う小川には入らず、あぜ道につつ立って眺めるだけ。

朱雀はというと、草履を脱ぎ、一人楽しそうに春の小川を満喫中。カエルに心ときめかせているようだ。

なんて幸せな奴……。

ってゆうかさ、小川にサメはいねえよ！

間違ってもこの極細、極浅の小川には現れねえから！！

カー、カー

なんてカラスが鳴きだす夕暮れ。  
空が茜色だあゝ。すっかり茜色だあゝ……。

「ここには……いねえみてーだ……」

肩を落としてぼそりと呟くリョウ。

って、えええ。今気付いた？

気付くの、オセエー……。

俺がもう帰ろうぜ。と、催促するべく口を開いたとき、

「俺、ちよつと隣町まで行ってくるわ！」

リョウが再び目を輝かせて口走る。

理由は聞かないでおこう。むしろ、聞かなくても分かる。

俺ってエスパー。

じゃあなと言わんばかりに片手を上げ、夕暮れの小川から風のよ  
うに去っていくリョウ。

俺はお前の熱い部分を知れて、嬉しいよ。うん、まじで！

「む？ リョウ殿はどこへ行ったのだ？」

散々遊んで泥まみれになった朱雀が、首をかしげてリョウの後姿  
を見つめる。

「夢を追いかけて旅に出たんだよ」

俺もリヨウの後姿を遠い目で見つめた。

そんな時。

「だ、助けてくださいいゝ……」

突如苦しげな、むしろ死にそうな、咽の奥から振り絞ったような声がどこからともなく。

俺と朱雀は同時に、助けを求める声が聞こえた、小川へと目をやった。

深さ10センチ、幅1メートルの小川で目にしたものは

リヨウが必死に捜し求めた、サメだ。  
サメだ?!

うつつそお?!

### 30・サメ捕獲大作戦（後書き）

全然大作戦ではありませんでした（笑  
だ、サプタイはこれでいこうと決意しておりました（笑

### 31・サメ現る

小川から突如聞こえてきた藁にもすがるような声。

「そそ、その殿方・・・だずげでください・・・」

目の前にサメがいる。そのサメ、しゃべってるんですが。

たくさん疑問点はあるが、以前にも似たような経験があるし・・・  
まあ置いておこう。

俺は冷静にこの現状を分析し、“まあ置いておく”という合理的結果を導き出した！

俺ってばマジで物分りいいよね。

むしろ、天才？

小川で悶え苦しむように、サメはビッチビッチと体全体を動かしている。

そりゃそうだ。

水深10センチじゃあ干からびるのも時間の問題だろうな。

俺が見るからにサメはあの有名な人食いザメの一種ではねえ。

明らかに小つちええ！

サケくらいのかさで、見た目はなんつつか・・・

・・・キモチワルイ。

深海に住んでそうなギョロツとした目、ぬめり気のある皮膚。

・・・やっぱキモチワルイ。おえっ・・・

触れるには物凄く抵抗感のある生き物が俺に助けを求めている！  
いやしかし、人として見捨てるワケにはいかねえ。

「だけど・・・だけど、やっぱり無理っ！！」

「頑張れ〜ハル〜」

他人事のように、暢気のんきに座りながら泥まみれスパッツ女が野次を飛ばしてくる。

こんのやろっ。

「ど、うが・・・お助け・・・ぐだ・・・ざ・・・」

その擦れた声を最後に、小川に静寂が訪れる。

最後の力を振り絞ってサメはとうとう息絶えた。

ラッキー

そんな時、心の中で小躍りする俺に水を差す一言が。

「残念だったな、ハル。この者まだ息があるぞ」

いつの間にかサメの側に座り込んだ朱雀。

全く動かないサメの体に手を当てて、わざわざ生存を確認してくれました。



しよっぱい顔で、唇をぐつと噛みしめる俺を見て、朱雀がむふふ、と笑った（ように見えた）。

そんなこんなで仕方なしに、死にかけのサメを学校へ運ぶことになったのだ。

### 32・美女現る（前書き）

ホントは31と32は同じ話だったのですが、かなり長くなるので2つに分けてしまいました。

短く感じると思いますが、ご了承くださいませ。

### 32・美女現る

ひっそり静まり返った理科室で俺は石鹸を泡立て、必死に手を洗う。そりゃもう、指がふやけて白くなるくらいに、だ。

そんな俺をよそに朱雀は家庭科室から持ってきた（盗んできた）食塩を、水を張った実験用のシンクにドバッとばら撒く。

「サメ子よ、生き返ってわたしに恩返しをするのだ！」

朱雀は勝手に付けたサメの名前を呼びながら、目を輝かせてシンクを眺めている。

・・・ああ、日本昔話の『鶴の恩返し』的なノリか。

その時、白目を剥いて微動だにしなかったサメが、突然カツ！　つと目を見開き、派手に水しぶきをあげて、俺たちの前に姿を現した。

ザバァッ

シンクから出てきたのは、さっきのキモチワルイサメ・・・

ではなく、

美しい女性だ。

は？

女性・・・？

キモチワルイのはどこへ？ この美女はどこから出てきた？！

マ、マジ？！ マジで鶴の恩返しのノリ、キターー！！

数々の修羅場をくぐり抜け、幾多の困難を越えてきた俺でもこの状況は予想外だ！

驚きと、滅多にお目にかかれないくらいの美女を目の前にして、図らずも俺、テンションが上がっております・・・！

水しぶきが床に落ちる中、目は泳ぎっぱなし。

朱雀は待つてましたと言わんばかりにほくそ笑む。

美女はシンクの水が静けさを取り戻した時、閉じていた目をゆっくりと開く。

海のような、真っ青な目。

瞳は深海のように吸い込まれそうな藍。

その姿は天女のように、全身に降りかかる水しぶきを弾いてる様は神秘的。

天女的ファッションには全く乱れが感じられない。あんなに派手に飛び出してきたのに・・・

俺は、あまりの唐突な出来事に言葉を失ってしまった。  
（朱雀は期待の目で息を呑んでるんだけど）

そんな静まり返った理科室に、場違いな声が響く・・・

32・美女現る（後書き）

乙さんきました（笑

### 33・乙現る（前書き）

33は過去最高に長い、1600文字です。  
忙しい時に読まないようにご注意ください！

### 33・乙現る

理科室に全く釣り合わない、場違いな笑い声が響いた。

「ヒヤハハ！ よお、ハルヒコ！・・・と、チツ。朱雀もいたのかよ」

廊下から理科室を覗き込む形で身を乗り出し、粗野な笑い声をたてた後、思いつきり舌打ちをする人物。

朱雀の変人仲間、『千年王城の玄武』だ。

つか、この神妙な空気読めよ！

最初の『ヒヤハハ』って笑い、いらねえーから。

もしかして、玄武ってKY（空気が読めない奴）か・・・？

玄武は俺と朱雀を順に見たあと、中央に置かれたシンクに美女が立っているのを目を丸くして見つめた。

美女はまだぼんやりした表情でシンクに突っ立ったまま動かない。

「ああゝ？ 竜宮の美姫みぎと名高い『乙』じゃねえかよ」

驚きと疑問に満ちた声で玄武が言う。

ほう、と短く呟き、朱雀は目を大きく見開いた。

「噂に聞いていたがこの者が深海の姫か」

納得！ と言わんばかりに、手のひらにポンと拳を乗せるポーズを取り、朱雀はうんうん頷く。



俺だけわかんねえーんだけど？

そんな時、美女がやつと自分の世界から抜け出したのか、ハッと気付いたように辺りを見回した。

彼女は玄武、朱雀・・・と順に見回し、ふと俺に視線を止めた。それもガン見。

え？　なんで俺？！

突如、シンクに立っていた美女はそこから一瞬で飛び出し、床に着地するのと同時に勢いよく土下座をした。

ゴツツ！！

額を床にこれでもかと密着させながら、鈴をころがすような綺麗な声で俺に語りかけてきた。

「殿方がわたくしを死の淵から救ってくださいだったのでね？　なんとお礼申し上げればよろしいのでしょうか？　ああ、殿方がいらつしやらなかったら、わたくしは・・・わたくしはっ」

途中から興奮してきたのか、最後は感極まって泣き出した美女。着物の裾で涙と鼻水を拭う音が聞こえる。

・・・なんだこの美女は。　サメから変身しちゃうくらいだから、たぶん朱雀絡みだろう。

「ハルヒコ、こいつは海を統べる海神の一人娘、竜宮のお姫様なんだぜ」

玄武は理科室の窓に肩肘をついて、楽しそうに説明する。

まじでか。もう俺、そういう話は慣れましたよ。なんぼでも来いや。

「わたしも噂で、竜宮にそれはそれは美しい姫君がいると聞いたのだ」

土下座したまま動かない美女の髪飾りをつつきながら、朱雀が楽しそうに付け加える。

・・・そっぴうイタズラやめなさい。

「わたくし、名を『乙』と申します。殿方のお名前はなんと申しますか？」

美女もとい、乙さんがデコを床に付けたままなので、俺は何とか顔を上げるように促してみるも、頑としてその低姿勢を崩そうとしない。

「・・・俺は櫻井 春彦って言うんすけど・・・あの、乙さんそろそろ顔上げて・・・」

俺が言いかけた時。

突然ガバツと上半身を上げる乙さん。

びっくりするから！ 心臓に悪いから！

その唐突な行動が俺の心臓にダメージ与えるんですけど！

「ハルヒコ様ですね？ わたくし、お礼致します！ 命を救っていただいた身。是非ともわたくしの城へ来てくださいませ！」

藍色の瞳がキラキラ輝いている。

顔をほんの少し紅潮させ、声が弾んでいるのが初対面の俺にも分かった。

こんな綺麗な女のヒトにお願いされちゃ、断れねえよ！

「ギャハハ！　なんか知んねえが、良かったじゃねえかハルヒコ。乙姫に気に入られるとは大したガキだぜ！」

玄武が一人笑い出す。

「・・・なぜハルだけなのだ・・・わたしだって助けたのに・・・！」

朱雀は自分にお礼の言葉がなかったのが気に食わないようで、ふくれっ面でブツブツ文句を言う。

・・・朱雀、お前はほぼ何にもしてないだろうが。シンクに塩をぶちまけただけだろう。

訴えかけるように、期待の眼差しで見つめる乙さん。

俺はじっと見つめられ、照れながらその場の流で頷いてしまった。

「じゃ、お言葉に甘えて・・・」

### 33・乙現る（後書き）

お疲れ様でした、しかしまだ続きます（笑

### 34・鶴の…ではなく、鯨の恩返し

俺は乙さんに先導され、また学校近くの小川にやって来た。  
なぜ小川？

俺たちの後には玄武と、いかにも不機嫌な朱雀が立っている。

・・・わかったって、乙さんからお礼貰ったら分けてやるから。

すっかり陽が沈んでしまい、辺りは暗くなっている。

そんな中、小川を見下ろす乙さんに、最大の疑問をぶつけてみることにした。

「あの、乙さん。ところで何でこの小川で死にかけてたんですか？」  
俺は乙さんの顔を覗き込むように尋ねる。

それを聞いた乙さんが眉間にしわを寄せて、切ない表情を浮かべた。

やべえ、俺なんかマズイこと言っちゃったかな・・・？！

乙さんは切実に語る。

「聞いてくださいますか、ハルヒコ様。昨日の事です。わたくしは退屈しのぎに竜宮から散歩に出かけました・・・」  
唇を歪め、さらに続ける。

「冬の間、特にすることもなく退屈で退屈で仕方ありませんでした。

そしてやつと春が巡り、久々に海ではしゃぐダイバーやサーファーを襲おうと、回遊ポイントに瞬間移動を試みました」

・・・

俺の耳が悪くなったのか？

俺の耳が正常であれば、人間を襲うつて聞こえましたが・・・  
いやいや、ちよつ、待てえええ！！ 人を襲うんですか？！

つてか、瞬間移動？ できんのオ？！

俺は体を硬直させ、額から流れる冷や汗もそのままに、眉間にしわを寄せて彼女を見つめる。

こんな美女からこんな言葉、聞きたくなかったな・・・

「ところが、冬の間瞬間移動術を使っていなかったせい、とんだ失敗をし、湖に出てしまったのです！ そして人間共がわたくしを見てキモチワルイだの、フカヒレに加工してしまおうだの言い張るのです」

さめざめ泣き出した乙さん。

確かに彼らの気持ちも分からないでもない。

むしろ、サメバージョンでいるからそんなことになるんだと思うが。  
今の美女バージョンで湖に出てきていたら彼らの対応も違ったと思うが。

「わたくし、命かなからこの小川まで瞬間移動してまいりました。  
しかし、どんどん力が抜けてゆき、助けを求めていたしだいでござ

います」

着物の袖で、鼻水をビーンとかむ乙さん。

「ギャハハ！ 川にいたのがハルヒコで良かったじゃねえか、乙姫！ 俺様だったら助けずフカヒレに加工してたぜえ」  
「わたしだって、わたしだって助けたのだっ・・・！」

玄武がからかうようにチャチを入れてくる。

朱雀はまだブチブチ文句をほざく。

「ハルヒコ様、これから竜宮へ繋がる浜辺まで移動いたします。そこから竜宮へ向かい、おもてなし致しますわ！」

乙さんが目を細めて微笑み、俺の手をギュッと握る。

乙さんはどの角度から見ても美女オーラが出ている。こんな美女がもてなしてくれるんだったら、どこへでもついて行きます！！

・・・でも、浦島太郎の物語が頭に浮かんでくるのは気のせいか・・・？

竜宮城へ行った浦島は、地上に戻ったとき、じいさんになったって・・・絵本で読んだけど。

目の前の小川が急に怖ろしく見えてきやがった。  
もし絵本どおりの展開だったら、俺ヨボヨボじいさんじゃね？

「面白そうだから、俺らは入り口の浜辺に先回りしてるぜえ」  
玄武が楽しそうな顔で、まず無理な事を言っただけだ。

このまちに浜辺が無いって分かってんのか？  
ちよっとなって来るわ！ の距離じゃねえぞ？ 海はさ。

「玄武様、わかりました。では後ほどお会いいたしましょう」

乙さんは玄武と朱雀に向かって丁寧にお辞儀をすると、俺の腕をガシッと掴み、深さ10センチの小川にダイブした。



### 35・地獄へのいざない

普通ならバシャッと水しぶきを軽くたて、小川の砂利の上に立つはずだ。

だが、浅いはずの小川に飛び込んだ俺の体はまるでブラックホールに吸い込まれるような感覚に陥った。それは絶叫マシンのあの心臓を持っていかれそんな感覚と等しい。

ここって小川だろ？！

ありえねえーーーー！

数秒間感じた浮遊感はいつの間になくなっていて、気がつけば足が地面に着いてる。

俺は固く瞑った目をそっと開けてみた。

目の前には、絶対ありえない光景。

海が広がっている・・・！

「ハルヒコ、いつまで乙にくつついてんだよ！」

玄武が俺の目の前に立っているじゃねえか。

おまけに朱雀もふくれっ面で立っている。

なにになに？

そんなにポピュラーなモノなんですか？ 瞬間移動術って。

瞬間移動を初体験した俺は、ビビッて乙さんにガッシリしがみついたままになっていた。

醜態だ・・・（ぐすん）。

「さあ、ハルヒコ様、わたくしの城へ参りましょう」  
乙さんが夜の海へザバザバ入って行く。

傍<sup>はた</sup>から見ればめっさ入水自殺だわ。

「ハルヒコ、ファイオツ！」 超いい加減な見送りだな、玄武。  
「仕方ない・・・今回だけはハルに譲るっ！」 朱雀・・・そんな悔しそうな顔で言わんでも。

俺は若干の不安と共に、手を引かれながら乙さんと一緒に海へ入っていく。

この時期は海水の温度がめちゃくちゃ低っ！ 夜だからなおさら低っ！

最初は膝まで浸かっていたが、腰、胸、しまいには首まで海に浸かった状態になった。

ホントに大丈夫か？！

浦島太郎みたく海の中でも呼吸できる・・・んだよな？

「さあ、城は深海にあります。一気にいきますよ」

乙さんも首まで海に浸かった状態で、にこやかに俺へ説明する。

ん？

なんかこう・・・水の中でも息ができるすごい術とか、無いの？  
え？

俺、このまま深海まで行くの？

ちよつと、待・・・！！

ドボンッ！

手を引かれて俺は暗い暗い海へ引きずりこまれた。

まるで悪霊に地獄へ引きずり込まれるかの如く。

ガボガボと、必死の形相でもがく、俺。

その後自分がどうなったかは分からない。

おかげ様で、そこから記憶がブツツリ途切れてしまった・・・

### 35・地獄へのいざない（後書き）

35に全く関係ありませんが、秘密基地のイラストコーナーに青龍社長のイメージ画を貼ってみました（笑）  
あくまで黒雛のイメージなので、スルーしても構いません。

### 36・終幕の教訓【人を見て法を説け】

俺が目を覚ました時、水平線から美しい朝日が昇るのを見た。

あれ・・・？

竜宮城か、ここ？

「大丈夫か？ ハル」

俺を覗き込むようにして声を掛けたのは朱雀。

どうもここは竜宮城じゃあないらしい。

ぼんやり霞んだ目をこすつて、上半身を起こす俺。

見渡すとそこは竜宮城の入り口と呼ばれた浜辺だった。

「朱雀・・・乙さんは？」

「乙姫ならば深海の城へ帰って行ったぞ」 朱雀はつまらなそうにポツリと答えた。

「もてなしは無理みてえだから、今度お礼の品を贈るってよ」  
玄武が眠たそうにあくびをしながら答えた。

あれからどうなったんだ？

朱雀にあの後の出来事を尋ねてみる。

「海の中でもがいて失神したそうだ。乙姫が言っていたぞ！」 な  
ぜか嬉しそうに話す朱雀。

お礼の竜宮城招待がチャラになって、ざまあみろ。とでも言いたいのかこいつは？

朱雀の言い草にカチンときたが、平静を装って続きを問う。

「って事は、朱雀と玄武が土左衛門になりかけた俺を助けてくれたのか？」

「そんなわけあるまい。浜に座って海面に浮かび上がったハルを見ながら笑っていたのだ」

「俺も俺も。プカッって浮いてきたのはマジウケたぜえ！よく生きてたな」 ギャハハ！

穏やかな朝に、笑い声が重なり合って響く。

・・・どうやら、俺は半土左衛門状態で、波に押されて浜辺に打ち上げられたようだ・・・

ブチッ！

そんな中、血管が凄まじく弾け切れる音が俺の頭蓋骨に響いた。

「てっ、てめえら・・・！俺が死にかけてるって時に助けもしねえで笑ってたのかぁー！！！」

ガバツと立ち上がり、まだ腹を抱えて笑う2人に詰め寄った俺。

本気でキレたね。

過去に得た、朱雀取り扱いの教訓さえ忘却の彼方。感情に任せて目いっぱい声を張り上げてしまった。

その時、鈍い金属音が俺の鼓膜を刺激する。

ガチャッ  
ジャラッ

俺はそれ以上の暴言を吐けなくなってしまった。  
額に浮かぶ脂汗。  
体中から吹き出る冷汗。

朱雀は鉄扇を俺の首筋に突き付け、声を封じる。  
玄武は拳銃を俺の胸に押し当て、動きを封じる。

「・・・ごめんなさい、うそです、ブラックジョークです・・・」  
両腕を上げて、か細い声で謝るしか俺にはできなかった・・・

ニンマリ笑みを浮かべる朱雀と、鼻で笑う玄武。  
無抵抗の俺に2人は満足したのか、それぞれの武器を懷にしまい込んで帰る準備を始めた。  
その場にへにやへにやと崩れ落ちる俺。

俺、サメを助けて良い事したはずなのに、2回も殺されかけるなんて・・・  
もう誰も助けてやんねえ・・・（うつうつぐう、ぐずん。

かくしてサメ騒動は無事、最悪のエンディングで幕を閉じたのであった。

### 36・終幕の教訓【人を見て法を説け】（後書き）

人を見て法を説け：相手をよく見極めて、その相手に適したやり方でモノを言え。という例え。

（ことわざ辞典 シリーズ13より）

サメ捕獲大作戦、終幕です。

黒雛は泳げないので海が怖いです。あそこは地獄の入り口だっ！



### 37・『ドン・八郎』死す！

恐怖体験をしたあとの出来事。

\*全然復活する気配の無い、干からびてミイラ状態の謙吾。

\*謙吾のために、毎日朱雀の隠し撮りブロマイドをプレゼントする俺。

\*プレゼント3日目には完全復活。

\*サメを探しに隣町へ行ったはずのリョウは、なぜか日本海まで行っちゃったそうだ。

\*この町に戻ってきた時、「クジラを見た」と満足げに語る。

\*当初の目的から完全に逸脱しているが、あえて触れないでおく。

こんな感じで、ようやく落ち着いた俺の日常。

ある日の日曜日。

俺は朱雀のいないリビングで、ソファーに寝転びのんびりくつろいでいる。

「きやははは」

「ふあはははは！」

秋奈の部屋から大爆笑が聞こえるが、さすがに慣れたぜ。フッ。

俺はニヤリと笑みを浮かべながら、変わらずソファーで寝転ぶ。

「うむ。やはりわたしはこの三上がねっちょりマリモを隠していると思うのだ」

「あたしは、マリリンだと思ってた。そう言われると三上が怪しいかもお！」

・・・

「いやあー！ 死んじゃやだあー！ ドン・八郎おおお」  
「おのれえ、ころ助めえ！」

・・・

いやっ、やっぱさっきのウソです。

秋奈と朱雀の会話が気になります。

また出てきた『ねっちょりマリモ』がどうしても気になるっ・・・！  
えっ、ドン・八郎死んじやうの？ ころ助が犯人？

169

俺はすでにのんびりどころではなくっており、ソファーに座り直して両手で頭を抱えた。

俺の頭が変なのか、それともアホ秋奈とスパッツ女の頭が変なのか？

俺が一人苦悩していた時、

ピンポン

誰かが訪問してきたようだ。

マンション友達の奥様方と買い物に出かけた母に代わって、俺が玄関に行くことに。

「フラミンゴ急便です、ハンコお願いしまーす」

俺の家に届いたのはかなりでかめの荷物。しかもクール便。

縦38センチ、横53センチ、高さ45センチの中型テレビが入るくらいのサイズ。

伝票を見ると、送って来た人物の名が・・・

『深海灘1丁目238番地 竜宮 乙』

なんじゃこのデタラメな住所はー！？！

『乙』って、あの時のサメ美女か？！

俺は心の中で絶叫しつつ、冷静にダンボールのテープを破り、箱を開けた。

その瞬間、俺の背後に稲妻が走る。ドドーン、みたいな。

そこには冷凍保存された数々の魚介類（主に深海魚系）。

・・・これって、竜宮城の魚達が犠牲になったってことだろうか・・・

乙さんがこのダンボールに生贄を入れるところを想像してしまい、俺の背筋に冷や汗が流れた。  
おっかねえ……！

ダンボールを台所にそつと置き、後はこのグロテスクな魚が詰まった箱は母に任せることにした。  
俺はひたすら晩飯にこの魚が出てこないことを祈る！！

秋奈と朱雀のアホみたいな笑い声を聞きながら、俺は堅く目を閉じたのであった……

37・『ドン・八郎』死す！（後書き）

サブタイ、37の内容とほぼ関係しておりません（笑  
悪気はありませんのでお許しください！

### 38・お残しは許しまへんでー！

どんなに肉体的に疲れていても、どんなに精神的に疲れ果てていても、朝はやってくる。

その疲れが癒えてなくても、俺は学校へ向かわなければならないのだ！

・・・ああ、義務教育つてめんどい・・・

そんな気だるい態度で乗り切った午前中の授業。

唯一の救いは楽しい給食時間だ！

・・・にんじんが食材の中に入って入れば、楽しさ半減だけだな。

他のクラスより1.5倍はテンションの高い3 - 5。

その中でもやけに五月蠅い奴が、謙吾。

「ちょ、知ってる？ 四越の側にあるメイドカフェに可愛いコ入ってたんだぜ！」

ニヤけて話す謙吾に、リョウが冷めた口調でツツコミを入れた。

「謙吾、お前さあ、スザクちゃんの前でそれ言っているの？」

・・・確かに。浮気(?)は良くないことだぜ、謙吾。

「ばっ、バツカやる！俺はスザクちゃん一筋に決まってる！  
！」

席から勢いよく立ち上がり、謙吾は顔を赤らめながら、朱雀の顔をチラチラ盗み見る。

そんな告白に近いことを言われた当の本人は・・・  
本日の給食である「ソフト麺 醤油味」を美味そうにすすっていた。

ナチュラルに無視したー！ー！！  
シカト

謙吾は涙目で朱雀を見つめながら、小刻みに震えた後、体中の骨が無くなったかのように机に崩れ落ちた。

「うっ、ヒックっ・・・！ソ、ソフト麺めえ・・・！」

泣きながら麺に八つ当たりする謙吾に、本気で同情するよ・・・

朱雀とリョウはおかわりをすべく、すでに席を立っていた。

謙吾はまだ泣きながら、2人の後に続く。

俺は一人、まったくコシの無い麺をすすりながら、窓の外をぼんやりと眺めていた。

「・・・このっ！ また群がりやがって、あっちいけ！ クソガラス共！」

声は窓の下に広がる花壇から響いている。

窓から顔を出し、下を覗いてみるとそこには誰かが落としたコッペパンに群がるカラス。

と、それを必死の形相で追い払う用務員のおっちゃんがいた。

ガァー、ガァー！

おっちゃんの筭と闘うカラス軍団。

しかし、人間様に敵うはずはねえ。

ものの1分足らずでカラス軍団は方々へ飛んでいってしまった。

用務員のおっちゃんは蜂の巣状態のコッペパンをゴミ袋に入れると、どこかへ歩いて行った。

そこへ、1羽のカラスが再び花壇へ降り立ち、必死にパンの欠片を探している。

「カラスも大変だよな・・・」

心にもないことを、ポツリと呟いてみた。

俺はソフト麺のスープに浮かぶ、にんじん（細切り）をポイ。っと窓から落とした。



花壇をうろつろしていたカラスは、空から落ちてきたにんじんを見  
つけ、急いで嘴へ放り込む。そして、窓から顔を出す俺をじつと見  
つめたのだ。

俺もカラスに対抗して、ジロつと睨み返す。

そんな顔しても無駄だぜ？

スープにもうにんじん入ってねえし、それにお前に食いモンやる義  
理はねえし。

そう、単に俺、にんじん嫌いなんだよね。

フツと口元に笑みを作り、俺は空っぽになった食器を見て、満足げ  
に頷く。

・・・俺はにんじんを攻略したぜ！

38・お残しは許しまへんでー！（後書き）

「お残しは許しまへんでー！！」は、名言であります。

かの有名な、忍者のたまご達が繰り広げる忍者ギャグ漫画に出てくる、食堂を取り仕切るあのおばちゃんのセリフ。

確かに、食べ物を残しちゃいけないですな。

### 39・「萌え」って何だ？

本日の授業はつつがなく終了いたしました。

あとは、無事家にたどり着ければ、平和な一日を過ごしたことになる！

そう・・・無事たどり着ければ。

「んじゃあ予定通り、メイドカフェに行くぜー！」  
給食時間に半べそをかいてた謙吾が、高らかに拳を突き上げ、テンション高めに叫び声をあげた。

謙吾の掛け声に、リヨウと朱雀が続く。

「おっしやあー！」 熱いね、リヨウ。

「あああああ！」 朱雀・・・その場のノリで適当に叫ぶな。

つか、俺そんな話聞いてないんですが！！

有無を言わせず、朱雀は俺の首根っこを掴み、半強制的に四越デパート経由のバスに押し込む。

俺に不参加という選択肢は無かったらしい・・・

道中バスの中で俺以外の3人は、他の乗客への嫌がらせのごとく、大音声で会話をする。

かなりテンションが上がってるな、こりゃ。

「女中喫茶店・・・ああ、どのような店なのであろう？　むふふふ」目を輝かせてなにやら想像しているらしい朱雀。その笑い方、かなり変質者チックですが。

「俺らは『ご主人様』って呼ばれるけど、スザクちゃんは『お嬢様』って呼ばれるんだよお」  
後部座席で朱雀の隣をゲットした謙吾が、話し掛けながらここぞとばかりに密着する。

「やつぱさ、メイドさんって他の人種とは違うと思うんだ！　なんかこう・・・オーラ？　そんな感じのがさ・・・！」  
リョウの興味が何か違うところにある気がするけど・・・まあ、いつか。

俺は3人のノリについて行けず、他の乗客にこいつらの関係者と思われないように、無言で窓の景色だけを見つめていた。

まあ、実際のところ俺もメイドカフェには興味があるさ！　ただど行くとなると心の準備ってもんがあるだろ。  
なのに・・・これは強制連行ってやつだと思います。

ふふふ、おかげでドキドキ感、一切無しだぜ！！

そんなこんなで四越前の停留所でバスを降りた俺たち一行。

バス通りから一本はずれた小路に、そのメイドカフェは佇たたずんでいた。

見た目は小洒落た喫茶店、というかメイドカフェと言われなければ、ごく普通の喫茶店に見える。

白を基調としたキレイな外観。オープンテラス付だ。

謙吾が慣れた手つきで店のドアを開ける。

カランカラン。と、扉に取り付けられた金属製のドアチャイムが鳴った。

「お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様」

舌つ足らずのような、甘い声が耳を通じて脳に響く。

胸に『まろん』と書かれたプレートを付けた、メイド服の女性が俺たちを迎えた。

謙吾とリヨウは完全に頬を緩ませながら、まろんちゃんの案内で奥の席へ向かう。

朱雀は入り口の前で、うつとりしながら何度も「お嬢様・・・」と繰り返す。

どうやらそう呼ばれて余程気分が良いらしく、恍惚ウツロイとしながらその場から動かないのだ。

そんな朱雀を尻目に、俺は戦場へ向かうかの如く、意を決したように心の中で呟いた・・・

親父・・・母さん・・・俺、萌えの世界に行ってまいります！

39・「萌え」って何だ？（後書き）

かなり何度も練り直したりしているので、更新に時間がかかっております…っう

#### 40・美少女メイドとにんじん、その心は？

ふと我に返り、前の2人を追いかけようと一歩踏み出したその時。

先程のメイド・まるんちゃんとは別のメイドさんが、慌てて俺の前に駆け寄ってきた。

「お、お帰りなさいませ！ ご主人様」  
ぎこちなくマニュアルに沿った接客をするこのメイドさん。

語尾に絶対ハートマークが付いている気がするな・・・

いやいや、それよりもきつとこのコが謙吾の言っていた『可愛いコ』だろう。

店内にいる他のメイドさんたちも可愛いけど、群を抜いているのが、このコだ。

年も俺たちに近いようだ。むしろ年下に見えるなあ・・・（それってバイト駄目じゃね？）

ゆったりカールした黒髪は、光にあたると深緑に近い光沢を放つ。長いまつげと丸くて大きな目、美肌にツヤぶるの唇。

レースをあしらった白いカチューシャに、白と黒でコーディネートされたフリフリのメイド服。ベルト付の黒パンプスに純白のオーバーニーソックス。シンプルな制服ではあるが、これが彼女たち自身



をさらに引き立てる！（謙吾談）

そんな黒髪のメイドさんに心を奪われていた時、目の前の彼女は俺を見て驚いたように、大きな目をさらに見開いた。

・・・なにに？ 見つめられるとすげえ照れるんですが・・・！

「あなたは、あの時の方ですね？！」

黒髪のメイドさんはキラキラと目を輝かせ、俺の手を両手で握り締めてきた。

手がっ、手があ！（照

いや、それよりも『あの時』って・・・？

俺はこのコに会ったことなんてないけど？

「えっと、どこかで会ったっけ？ 俺君の名前知らないけど・・・」

心臓が高鳴りつつも、冷静に言葉を返し、彼女の胸元にある名前のプレートに視線を向けた。

『烏丸』と漢字で書かれた可愛いプレート。

なんだろう、名前が・・・あんま可愛くないんですが・・・

「ハイ 武城中の敷地で会いましたあ、あたし、ヤタノミヤノカラスマル八咫宮烏丸カラスマルって言いますう。長いんで『烏丸』って呼んで下さい」  
語尾にハートマークをつけながら、烏丸ちゃんが俺の手をさらに強く握り、キュートに微笑んだ。  
現代じゃありえねえ名前を名乗ったが、彼女の名前なのだから、仕方ないですよ。  
うんうん。

「よろしく、俺は春彦って言っただ」  
彼女につられる様に、俺も微笑みながら・・・いや、デレデレしながら自己紹介をする。

そんな俺を見て、烏丸ちゃんは更に表情を明るくした。

これが萌えの力なのか・・・？

いや、ちよい待ち。

俺は学校でこのコにあった記憶はねえ。

こんな飛びきり可愛い子を見かけたら忘れるはずねえしさ。

「覚えてませんかあ？ あたしはあの時の事、忘れてません・・・だって、ハルくんがあたしを助けてくれた王子様だもん・・・きゃあ」

烏丸ちゃんが頬を赤く染め、両手で顔を覆いながら続ける。

「お腹が減って死にそうだった時、優しい王子様がにんじんをくれ

た事、忘れるわけないわ！ とゆうわけで・・・ハルくん、あたし  
のご主人様になって下さい！！」

『とゆうわけ』ってなにー？！  
ってか、色んな意味でなにiiii？！

## 41・カラス再び

恥ずかしさと驚きが同時に俺を襲う！

王子様って・・・にんじんって・・・ご主人様って・・・?!

「俺、君を助けた覚えはないし、にんじんはカラスにやった記憶しかねえんだけど・・・」

あまり良くない頭をフル回転し、彼女の記憶を探してみるも、やっぱり思い当たらねえ。

俺の言葉を聞くや否や、烏丸ちゃんが興奮気味に一步前へ出た。

「ハイ にんじん貰いましたあゝ やっぱり、覚えてくれてたんですねゝ！ だってあの時あたしとハルくん、目が合ってたもの」

・・・まさかつ！

・・・ああ、何となく嫌な予感ほしてたけど、受け入れたくはなかったぜ・・・

あの時花壇に1羽だけ戻ってきたカラスが・・・この萌え美少女・・・だそうです。

そんなの、そんなの間違ってるうーっ・・・!!

真実を知らない方が、幸せだって、何かで読んだ気がする。  
俺はガツクリ肩を落として力なくうなだれた。

「たしかに、目が合ったな」 俺はカラスに睨まれた気がしたから、睨み返したただけだな。

「やっぱり、ハルくんはあたしのご主人様になる運命のヒトなんだわ！！」

黒真珠のような目を潤ませて、俺の困惑した顔を食い入るように見つめる烏丸ちゃん。

彼女の正体を知ってしまった以上、素直に受け入れるわけにはいかねえ！

言葉に詰り、俺の額からは滝のように汗が流れ落ちる。

俺を情熱的に見つめる黒髪のメイドさん。

お互い目の前に立っているのに、温度差を感じるんですが。

そんな沈黙を破ったのは、今まで店の入り口で突っ立っていた朱雀。

「ヤタノミヤノカラスマル八咫宮烏丸、ハルをそなたの主にしてやることはできぬぞ。今はわたしの元に居るからな」

やっと自分の世界から抜け出てきたのか、先程のうっとりした表情は消えていた。

烏丸ちゃんをフルネームで呼ぶ朱雀。

やっぱりいつものパターンで2人は知り合いのようだ。

烏丸ちゃんがその声に反応し、俺の陰になって見えないのか、頭をひょこっと出すようにその声の主を確認した。

その時、彼女は喉の奥に詰ったような、短く低い驚きの声を発したのだ。

「あっ・・・！」

次の瞬間、俺の体を押しつけ、腕組みをしながら立っている朱雀の前に駆け寄った。

片膝をつき、左の拳を床につける、いかにも主に仕える従者が取るようなポーズでひれ伏す烏丸ちゃん・・・

俺はただただ、呆然とその現代に似つかわしくない光景を見つめていた。

「お、お久しぶりでございやす！ 朱雀様！！」

顔を紅潮させ、目に薄っすら涙を浮かべる彼女。

先程の乙女チックな口調は一体どこへ？

なにこの江戸っ子みたいな、落語家みたいな口調は？

萌えはどこへーーーー？！

#### 41・カラス再び（後書き）

このメイドカフェ編では萌えにあまり触れていませんが、ご了承くださいませ。

## 42・素晴らしき日本のゴミ事情（前書き）

42は長めになっております。  
気合で乗り切ってくださいませ。



## 42・素晴らしき日本のゴミ事情

メイドカフェの店内入り口付近にて、スパッツを履いた少女にひれ伏す一人のメイドさん。

なんだ、この画は？

「ハル、この者はわたしの眷属<sup>けんぞく</sup>なのだ。もう会っていたとは知らなかったぞ？」

烏丸ちゃんに目線向けた後、朱雀は小首を傾げて俺に尋ねる。

眷属・・・？ 相変わらず言ってること理解できねえな・・・  
つか、知らないのも無理ねえよ。丁度朱雀が給食のおかわりに夢中だった時だもんよ。

「ちよつとね・・・」

俺が話を濁そうとしたとき、間髪入れず、烏丸ちゃんが謎の「やんす」語で切り出したのだ。

「そうなんでやんす！ あちき、最近めつきり社<sup>やしろ</sup>に供物があがらず、仕方なくこのバイトを始めやした。しかし、まだ給金も入らぬ状態・・・空腹に耐えかねて残飯を漁ってやした・・・そんな時、このお優しい坊ちゃんが食べ物を恵んでくれたのでやんす！」

世の中のメイドさん愛好家の方々が、この光景を見たら泣きますよ？  
美少女のメイドさんが『あちき』って・・・

萌えが最高に似合うコが『やんす』って・・・

「そうか、苦勞していたのだな。だが、ハルはそなたにやれぬぞ」  
朱雀は気の毒そうに、烏丸ちゃんの肩にそつと手を置いた。

俺は朱雀の言い回しが妙に気になり、固唾を吞んで続きの言葉を待った。

「もちろんでございやす！ この坊ちゃんが朱雀様の従者であつたとは露知らず・・・烏丸をお許し下さい！」  
深々と頭を下げ、切実な声で詫び入る烏丸ちゃん。

「うむ。しばしわたしの元に、置いておかねばならぬからな」  
さして気にする様子もなく、にっこり頷く朱雀。

従者・・・  
俺、そういうポジションだったワケ？

烏丸ちゃんがゆっくりと顔を上げ、朱雀の金の目をじつと見つめた。  
「朱雀様、あちは陰ながら見守らせていただきやんす。」

俺を抜きに意味深な会話を交わす2人。  
俺の口は半開きになったまま元に戻らず、理解不能の会話だけが耳を通過していく。

遠く彼方から（距離にして約20メートル程だが）甘ったるい声と、  
やけにでかい歓声が店内に響いた。

「それでは、まろんの愛情でさらにおいしくしちゃいまあす」

「「イエーイ」」

ああ、すんげえ楽しそうだな、謙吾とリヨウ・・・  
俺だけ全然楽しくないのはなぜだろうか？

これはもう、萌えの世界から脱出して、家に帰るべきだと俺は考える。

肩からずり落ちた鞆を掛け直して、一直線にドアへ向かった。

さらば、萌え。

ドアノブに手を掛けたその時、可愛い声が待ったをかける。

「待つてくだせえ・・・じゃない、待つてハルくん！ あたし、お  
礼を言いたかったの・・・ホントにありがとう！ あたしの王子様  
じゃなかったけど、これは運命の出会いだと思うの・・・！ だか  
ら、だから・・・」

元の口調に戻った烏丸ちゃんは両手の指を組み合わせて、胸の前に  
置くと、上目遣いで訴える表情を見せた。

彼女の可愛らしさに、世の男たちは間違いなく悩殺されるだろう。

彼女の正体を知っている筈の俺さえも、心が僅かに揺れる。

彼女の続きの言葉に息を呑む。

「だから・・・また食べ物、恵んでね!!」

切実な叫びだった。

それもそのはず、近頃はゴミの処理も厳しいものだ。  
残飯を探すのも一苦労だろうな。

「・・・うん・・・」

俺は引きつった笑みを浮かべて一言返し、そのまま烏丸ちゃんに手を振って、足早にメイドカフェを後にした。

「行つてらっしゃいませ、ご主人様」 烏丸ちゃんのマニュアルに沿った、ぎこちない声だけがいつまでも耳に残る・・・

まだ明るい空を見つめて俺は黙々と小路を歩く。

俺の後を追ってきたであろう朱雀が横に並び、声を弾ませて話しかけてきた。

「女中喫茶店とはなかなか面白い所なのだな！ ハル、また行こうではないか」

・・・もう行かねエーよ！！俺だけ全然面白くなかったんだけど！

かくして、俺の萌え初体験は一瞬で終了した・・・（ぐずん。

### 43・ハル、平和を勝ち取る

祝日

AM 11:00

今日の俺は気分最高です！

なぜかというと、今我が家にスパッツを履いた悪魔がないからなのです！

毎日毎日、ストーキングまがいのように後をついて来る朱雀。

折角の休日も奴がいると、平日と比べて疲れが3割り増しなのだ。

そんなわけで、妹・秋奈に以前四越デパート社長、青龍さんから貰った商品券を渡し、好きなものでも買ってこいよ！ と、優しい兄を演じてみたわけだ。

当然上機嫌で券を搔<sup>か</sup>つ攫い、デパートの開店時間に合わせて母と朱雀を（無理やり）引き連れ家を出たのだ。

もちろん、朱雀が秋奈に連れて行かれることは計算済み！

なぜか朱雀の波長と合う秋奈は、仔犬のように懐いているからな。

俺には理解できないが。

こうして俺はつかの間の平和を手に入れたのである！！

リビングのソファーに寝転がり、大きく伸びをする俺。

ああ、久々に一人きりを満喫できそうだ・・・！

静かなリビング。

テレビの音声も、走り回る足音も、遠慮を知らない大音声のおしゃべりも、今は無い。

今この家に俺以外の人間はいないのだから。

「なんじゃ、お前さん一人か？」

が、ソファーの後から老熟した言い回しの、どこかで聞いた声が急に聞こえた。

口から心臓が飛び出るんじゃないか、って程ビビる俺。

不意打ちは厳しいってば・・・

勢い良く上半身を起こし、声の主を確認するも、目線の先には誰もいない。

俺は座ったまま、部屋をぐるりと見渡した。

おかしい、誰もいねえ・・・

だけど、さっきの声は前に聞いたことがあったような、無いような・・・

一人ソファーの上で顎に手をあて、首を捻って考えてみるもさっぱりだ。

「こりゃあ！ 無視するでないぞ、ハル少年！」

再び聞こえた声は、俺の名前を言い当てた。

声の出所はやはりすぐ近くのように、俺は立ち上がり、部屋全体を見渡したあと、ソファの後に目線を落とした。

声の主を確認した俺の顔は、おそらく苦虫を踏み潰したそれだろう。

目線の先には杖をつき、二本足で直立するキツネの姿があった。

出てきたようまた来ちゃったよう・・・どんべえさん、じゃない権兵衛さん。

俺のつかの間の平和は、1時間30分であえなく終了・・・である・・・（ぐすん）。



#### 43 ハル、平和を勝ち取る（後書き）

また来ました、どんべえさん。

#### 44・相手の名前は正確に。(前書き)

ちよつと真面目臭い話になっているかも……いないかも。(オイッ

#### 44・相手の名前は正確に。

「ふむふむ、遠慮は要らん。長椅子に掛けて結構じゃよ、ハル少年」

偉そうに片方の前足を指し出し、俺にソファ―に腰掛けるよう促す  
権兵衛さん。

俺ん家なんですけど・・・！！

勝手に他人の家へ侵入してきた、薄汚れたキツネ。  
俺は当たり前の疑問をぶつけてみた。

「あゝ、何しに來たんスか？」

偉そうな態度のキツネに、俺は一応低姿勢でモノを尋ねる。  
おそらく、おそらくだが、俺の方が年下であろう。

「決まっておるじゃろう！ 朱雀殿と茶でも思っ  
て伝説の茶葉を持ってきたんじゃ、お前さんに用なぞあるかい！」

礼儀を弁え低姿勢わきまで発言したにもかかわらず、権兵衛さんは俺を一  
喝した後、くどくど説教をたれやがる。

え、理不尽じゃね・・・？

どうやら朱雀とお茶を飲むためにやって來たが、その朱雀がいない

！ と、憤慨。

遠いところ折角来たのだから、

「お茶を飲んでから帰る」と、風呂敷から茶葉とお茶セットを取り出し、湯飲みに注いだ熱いお茶を俺の目の前に出す、権兵衛さん。

ふふふ、ジ・エンド・オブ・俺の自由。

前回置いていったお土産のせいで、権兵衛さんをあまり好きになれないでいる、俺。

何を話そう・・・

沈黙が訪れ、茶を啜<sup>すす</sup>る音だけが広いリビングに響いた。

「わしゃてつきり朱雀殿が、ヒトを忌んでおったのかと思ったがの・・・」

突然権兵衛さんはため息に似た、穏やかな声を俺に向けた。

『ヒトを忌んでいた』？

どういう意味だろう？

そういえば、俺は朱雀の事をあまり知らない。

俺と会う前は一体何をしてた？ 本当に人間じゃないとしたら、一体何者だ？

もしかしたら、朱雀が居ない今、それを聞き出すチャンスかもしれないねえ！

権兵衛・・・じゃない、どんべえさんに・・・こんべえ・・・あれ？　どっちだっけ？

まあいいか、どんべえさんなら俺の知らない謎を知っているかもしれない。

なにせ朱雀の茶のみ友達なのだから！

出されたお茶を啜った後じっくり間をとり、遠回しのセリフは抜きにして、核心から入ることにした。ちゃっちゃと聞いて、さっさと帰ってもらおう！

「あの～どんべえさん、朱雀は本当に人間じゃないんスか？　（もはや人間の域を超えてるけど）」

テーブルに湯飲みを置き、食い入るように目の前の（薄汚れた）キツネを見つめる俺。

どんべえさんの少しつり上がり気味の目が、僅かに笑みをたたえたように感じた。

#### 45・自由は果てしなく遠く

俺の間に、目を細めながら答えるどんべえさん。

「それはお前さんの捕らえ方次第じゃ、ヒトなる者と見るか、ヒトならざる者と見るかは己が決めればよいのだ」

どんべえさんの答えは、俺の望むものではなかった・・・  
いや、キツネに聞く自体が間違いだったのだ・・・

俺は無駄骨だったことに、聞くんじゃなかった。とガツクリ肩を落とす。

「まったく、朱雀の周りの連中はなんでこんなのかなんだ。つかかなんで俺に絡んで来るんだよ・・・」  
テーブルに突っ伏して、うわ言のように呟く俺。

その時、不意に声を殺したような笑い声が聞こえてきた。

「く、くくっ」

伏せていた顔を上げ、目の前のどんべえさんをチラリと上目使いで見つめた。

「くく、ふおふおふお！」

現代では使わないであろう、微妙な笑い声を上げるどんべえさん。

俺はギョツとして、背筋をピンと張りながら、反射的に体を起こした。

「ハル少年、確かに皆お前さんに興味を持っておるがな……。一つ教えておいてやろう。皆が集まるのは、朱雀殿がニンゲンであるお前さんと一緒に居るから、じゃよ」

何も知らない俺に、たった一つのヒントを与えて、満足そうに頷くどんべえさん。

キツネと人間じゃ、やっぱり解り合えないと俺は思うよ。  
種族の壁は越えられないものだ。

なんか、重要な事を言ったのかもしれないが、さっぱりだ！！  
さっぱり解んねえよ！！

目が点の俺にどんべえさんはどっこいしょ。と重い腰を擡<sup>もた</sup>げて立ち上がる。

「邪魔したのう、ハル少年。朱雀殿によろしく伝えといってくれんかの」

そう言う例の如く、どこに置いてあったのか杖を取り出し、それに付いていた一枚の葉っぱを額に当てた。

「いずれ解るわい」  
ニヤリと笑みをこぼした後、ボンッ！ と、ふざけた煙に捲<sup>ま</sup>かれてどんべえさんは姿を消した。

朱雀の正体を探るつもりが、更に謎を増やされ、呆然と俺の前にだけ残っている湯飲みを見つめた。

玄関から賑やかな声が僅かに聞き取れた。後数秒足らずで櫻井家の女性陣が買い物から戻って来るだろう。

・・・まあ、いずれ解ることだって言われたし、今は深く考えないようにしよう。

俺は数秒しか残されていない自由を満喫すべく、勢い良くソファアの上にダイブする。

が、ソファアにたどり着かないうちに、バカでかい笑い声と、大量の荷物が津波のようにリビングへ押し寄せてきた・・・

秒殺かよ・・・！（ううつ、ぐすつ。



## 46・クリスティーナを捕獲せよ

キンコーン

カーンコーン

月曜日の朝、俺は今日もけだるい授業を受けに学校へやって来た。もちろん朱雀も登校。

クラスの皆はこの謎のスパツツ女をフツーに受け入れてる。大した疑問じゃないらしい。

「おす、謙吾にリヨウ」

「お早う、謙吾殿リヨウ殿」

「おはよースザクちゃーん」 謙吾は急いで駆け寄り、朱雀の手を握ってアピール。俺におはようはねえのか？

「よっ」 片手を小さく上げて、俺と朱雀に挨拶するリヨウ。いやーマジクールだねえ。

朝の賑わいもチャイムと共に終わり、担任の小山先生が教室に入ってきた。

一通りのHRを終えて、「じゃあ今日も張り切っていこう！」と、小山先生がシメる。

先生が教壇を離れると、早々に教室から出て行く朱雀を横目で確認。皆席を立ち、授業が始まるまで再びおしゃべりを始めていた。

俺たちも例外ではない。

「ちょ、聞いて聞いて。昨日駄菓子屋のおっちゃんに爆竹もらっちゃってさくために使ってみたけど楽しいんだよお、ハルとリョウも遊ばね？」

「お前中3にもなつて・・・」

「あはは、俺は賛成」

そんな時、小山先生がおもむろに俺たちの席までやって来たのだ。

「おい、謙吾・リョウ・春彦ちよつといいか？」

珍しく名指しされ、俺たち3人は顔を見合わせた。

「なんスか、山<sup>やま</sup>丁」

リョウが一言返す。

「ってか、『山丁』ってなんだよ？」

小山先生、もとい山丁は俺たちを見下ろしながら、話を切り出した。  
「お前ら放課後暇だろ？ ちよつと頼みがあるんだが・・・」

めっちゃストレートっすね。ま、確かに暇人ですがね。

「実は、1週間前に俺の家の裏手にある林で、子猫がうろついていたな。たぶん親とはぐれてしまったんだらう、腹をすかせて鳴いていたんだ。」

山丁は悲しそうな顔で語りだす。

「不憫に思ったおれは、子猫を家で飼うことにしたんだ。それはもう懐いて懐いて、可愛いつたら・・・」

体育教師の山丁が乙女のような表情でうつとりしながら話す姿は・・・微妙っ・・・

「ところが！ 昨日の夜・・・突如響いた爆竹の音に驚いたクリスティーナ（子猫の名前）は窓から飛び出し、竹林の方へ逃げていつてしまったんだ・・・！！」

・・・爆竹・・・

俺はそろーっと謙吾の方に顔を向ける。リョウも同じく謙吾に視線を向けていた。

「・・・あ・・・そういえば、山丁ん家って【ハゲ竹林】たけやしの近くでしたっ・・・け？」

おもいつきり、しまった！ という顔をしながら謙吾は恐る恐る言葉を挟んだ。

謙吾も、通称【ハゲ竹林】と呼ばれる、広大な竹林を裏手に構える町に住んでいるのだ。

「そうだが？ まあ、そんな事があつてな、お前達どうせ放課後暇だろうから、クリスティーナを探し出して欲しいんだ！ おれも仕事片付いたら向かうから」

俺とリヨウがジロリと謙吾を睨み、当の謙吾は顔に変な汗を滲ませて、話を黙って聞いていた。

100%謙吾の責任だろ。

「分かりました、俺らでクリスティーナを探しますんで」  
フリーズしてしまった謙吾に代わって、リヨウが代弁する。

こうして、俺たち3人によるクリスティーナ捕獲作戦が始動した。

・・・今度はネコかよ！

#### 46・クリスティーナを捕獲せよ（後書き）

今回から始まる話で全登場人物が揃います。  
でもって、揃い終えたらラストに向かいます…！

## 47・ハゲ竹へGO！

昼のチャイムが校内に響き渡る。

給食を食べながら、俺と謙吾とリヨウおまけとして朱雀が作戦会議を開いていた。

「でも、ハゲ竹林（略してハゲ竹）だったって、かなりでかいし簡単には見つかんねえと思うな」

顎に手を置き、リヨウは難しい顔をした。

その言葉に、朱雀がピクリと眉を動かす。

「竹林・・・あの西の林に何をしに行くのだ？」

この表情、少し機嫌が悪いのだと、俺だけが感じ取った。

「ちょっとね、山丁の飼い猫が逃げちゃってさあゝ俺たちが仕方なく探しに行くわけ」

さも自分は悪くない。みたいな言い草だな、謙吾！

「『やまてい』・・・？」 小首をかしげる朱雀。

朱雀には『ティー』が聞き取れないらしい。お前はおじいちゃんかよ？

「そゆうこと。朱雀は関係ないから、ついて来なくていいんだぜ？」俺がからかうように、意地悪く言った時、思いもしない返事が返ってきた。

「ハル！ 西の林へは行つてはならぬ！ あそこは白虎が有する領

地、あの地にだけは行つてはならぬ!」

給食の食器をひっくり返す勢いで、朱雀がバンツ!と机に手を付き、猛然と立ち上がる。

朱雀の大声で、テンションの高い3・5も一気に静まり返った。こんなに声を荒げる朱雀を見るのは、俺も初めてのこと。

俺の目線に合わせて朱雀が落ち着きを取り戻した口調で続ける。

「白虎は玄武や青龍と違って、甘くはない。あやつは己に害する者であれば、ためらいなく打ち捨てるのだ」

俺は朱雀の迫力に押され、黙って頷く。

謙吾とリョウはその緊迫さがさほど伝わっていないらしく、給食のおかわりに席を立てていた。

ちよつとは話聞こうぜ・・・

そんな熱を帯びた給食時間が終わり、5時限目の授業もほどなく終わった。

生徒は皆騒ぎながら玄関へ向かっていく。

放課後の捕獲作戦は始動した!

朱雀にハゲ林へ行くのを止められている俺たちは、朱雀に内緒で山へ行くことにした。

「朱雀、俺たち山丁にイット・イズ・コール、だから先に家に帰っててくれないか？」

朱雀の肩にポン。と手を置き、諭すように語りかける俺。  
英語はデタラメだが、必殺技には違いねえ。

「『やまてい』に・・・いと、い、えずこーる？ うむ・・・ならば仕方あるまいな」

口をもごもごさせて、最後は頷く朱雀。

勝った・・・！！

朱雀がおとなしく学校を出て行くのを確認した後、俺たちは急いでハゲ竹へ向かった。



## 48・竹林に潜む

## の恐怖(前書き)

注) 48の終盤に『お下品』な表記がございます！

「まあ、こないやらしい言葉を使うなんて」と思ってしまった方。

くれぐれも目を通さぬよう、ご注意下さい！…！ご注意下さい！…！

## 48・竹林に潜む　　の恐怖

武城中からハゲ竹へは、歩いて40分ほどかかる。

その40分の間に様々な作戦が練られたが、どれもくだらない内容ばかりだ。

その一

ハゲ竹から山丁の家まで、またたびを点々と撒く　【またたびにつられて家に戻る作戦】

その二

子猫の母親のフリ（キグルミ着用）をしておびき寄せる　【クリスティーナマミー作戦】

その三

ひたすらクニエイさんのマネをして「ルールルル」と呼ぶ　【北の国からクニエイ作戦】

e t c . . .

全部却下！！

特にその三はキツネ呼ぶ時の掛け声だろ！

うだうだ3人で思いつく作戦を考えていた時、俺はふと朱雀の言葉を思い出した。

『西は白虎の領地・・・』

朱雀の話し振りからすれば、白虎はどうやら謎の組織『千年王城』

のメンバーだろう。

しかも、朱雀があれだけ念を押すほどの人物だ。  
おそらく組織最強的存在だな。うん。

朱雀や玄武がかなりの危険人物なのは分かる。

その朱雀が注意を払う奴なんだから、相当危ない奴なんだろう。

俺は作戦そっちのけで、まだ見ぬ『白虎』の想像図を頭の中に描きながら歩いていた。

きつとマツチヨ。

たぶんスキンヘッド。

おそらく武器は槍か斧。

間違いなく強暴だと思う。

かなり怖い想像図が出来上がり、俺は一人身震いした。  
そんなこんなで40分が経過し、目的のハゲ竹に俺たちはたどり着いた。

とりあえず、作戦はねえ！

各々分かれてクリスティーナを見つけるべし！！

こんないい加減なミッションが今、スタートしたのである。

「おいクリスティーナあゝ、カニカマやるからでてこい」  
たいしてやる気の無い声で、一応ネコを探す俺。

俺と謙吾とリヨウはそれぞれ手分けしてクリスティーナを探すことにしたのだ。

そんな時、穏やかな林に怖ろしい叫び声が響き渡る！

「ぎゃあああああああ！ おっ、おうっ、俺のっ、俺のエア タービュランス+11（NIKE's PLUS）がああああああ  
っ！」

声の主は謙吾。

その直後、ピタリと声が止んだ。

これらを踏まえて推測すると、謙吾は気を失ったのだろう。

と、まあ深刻に語ってみたがこの叫び声はおそらく、お気に入りのNIKE'sのスニーカーでムニョっと踏んでしまったための哀れな断末魔（死んじやいねーだろうけど）。

・・・山や林にやよく落ちてるからな・・・ウン がさ・・・

一人戦線離脱したため、俺とリヨウは2人でクリスティーナを探すはめになったのである。

#### 48 竹林に潜む の恐怖（後書き）

…え？ 注意書きするほどでもない…？

#### 49・「ル」の連呼を侮るなかれ（前書き）

これからシリアス（？）な展開に突入…っぽです。

#### 49・「ル」の連呼を侮るなかれ

ああ、もう帰りてえな・・・

俺がそんな事を思っていたそのとき。

目の前に子猫がちょこんと座っているじゃねえか。

なに？ このアツサリ感は何？

「にゃあ」

可愛らしい一声をあげた子猫、いや、クリスティーナはつぶらな瞳で俺をじっと見つめている。

落ち着け春彦！ ここで逃がすわけにはいかない！ どうする？

ガバツといくか？！

いや、ここは慎重にいくべきだ！！

心の中で自問自答を繰り返し、俺はゆっくり屈み、クリスティーナの前に手を差し出し優しく声を掛けた。

「ルールルル、ルールルル」

恥もアホらしさも忘れ、俺は【北の国からクニエイ作戦】を決行していたのだ。

その不思議な音色に導かれるように、クリスティーナは俺の手元に

歩み寄り、その身を委ねた。

クリスティーナ、GETだぜー

子猫の小さな体を抱き上げ、小躍りしながらハゲ林を出ようと踵を返した。

その時、

竹林特有の静けさを破る、甲高い笛の音が聞こえてきた。  
俺の背後に何者かの気配を感じる。

バツと振り向くと、  
そこには奇妙な少年がぼつんと立っている。

どっからどう見ても小学5、6年生。

真っ白な髪に白い肌、平安時代風の白いへんてこな服で、たしか・

・水干とかいう服装だ。

その目は朱雀と同じ、金の目。

だが、朱雀とは違い、怖ろしい獣のように感じる・・・

驚きと同時に緊張が押し寄せる。

俺はクリスティーナを小脇に抱えながら、今までにない圧迫感を覚えた。



少年は無表情且つ、感情がこもっていない声で、俺に話しかけてくる。

「お手前が小生の眷属、八葦杜守を攫った者か？」

・・・は？

朱雀以上に会話が理解できねえ。

俺は首をかしげて少年にやりわり質問返しを試みた。

「ボク、名前は？　どこから来たんだ？　お母さんと一緒じゃあないのか？」

「命が惜しくば小生の問に答えよ」

小馬鹿にするように尋ねた質問。

少年は表情一つ変えずに、厳しく問いただした。

生意気なガキめ・・・！

態度を一変させ、俺はいつも通りの声で少年に言葉を返す。

「なんとかのカミなんて、俺は知らねえよ！　攫うとか人聞き悪いこと言うもんじゃねえぜ」

腕を組みながら語尾荒く説教をたれ、少年を睨む。

すると少年は少しつり上がった目を大きく見開き、すぐ元に戻すと冷やかな口調で告げた。

「ならば、今すぐお手前が連れてくる小生が眷属を開放し、この地から出てゆくがよい」

少年は竹笛を片手に持ち、俺に指差すようにその手を振り下ろす。それはまるで真剣を向けられたような、気味の悪い感覚。

俺の背中に一筋の冷たい汗が流れる。

#### 49・「ル」の連呼を侮るなかれ（後書き）

あつ、気付けば1万5千アクセス…！！

ああ、目と鼻から涙が出そう…！！

皆さまありがとうございます。後もう少しだけお付き合い下さい  
！

## 50・ハル、キレル

【ハゲ竹林】に緊張が走る。

そんな時、緊迫感をぶち壊す声が、俺と少年の近くで聞こえてきた。

「ハルー、ネコいたかぁー？」

細い竹をかき分けて姿を現したのは、リヨウであった。

突然出てきたリヨウに驚いたのか、少年は俺から視線を外し、声の主をジロリと睨みつけた。

リヨウも奇天烈な衣装を身に纏まとっている少年を不思議に思い、俺に尋ねてきた。

「んだ、このヘンテコなガキは？」

ズビシッ。と少年を指差し俺に説明を求めるリヨウ。

あぁっ、この険悪な雰囲気の中、この発言はやばいんじゃないか？

案の定、少年は無表情さに磨きをかけたように冷ややかな表情で一言。

「うつけめ」

手に持っていた竹笛を唇にそつとあて、甲高い笛の音を林に響かせた。

ピイイッ

その音色は静寂を破るような、脳に突き刺さるような、嫌な響き。  
俺は一体それが何を意味するのか分からず、小首をかしげた。

ドタッ

不意に俺の背後で何かが倒れる音がする。

振り向くと、そこにはうつ伏せで動かないリヨウの姿があった。

「リヨウ?!」

慌てて駆け寄る俺に、少年が冷徹な言葉を投げかける。

「ヤッヨシノモリノカミ八葦杜守を素直に引き渡せ。小生、気長に待つほど寛大ではない」

俺は一気に血がのぼり、我を忘れて怒鳴り声をあげた。

「んなことどうだっていい! てめえッ、リヨウに何をした!!」  
咽が壊れるんじゃないか、ってほどの音量でありつただけの怒りを少年にぶつける。

少年は冷めた目で、ため息をつくように答えた。それも、淡々と。

「小生の笛は神経を破壊する、その童わらわしの脳に音を通したのだ。じき心の臓は止まるであらう」

その言葉に、俺の怒りは頂点に達したのだと思う。  
奥歯を強く噛みしめ、軋む音が頭蓋骨に響いた。

距離にして20メートル。

少年を殴り飛ばそうと、思い切り大地を蹴り上げる。

俺は、大切なダチをまるで虫のように扱うこの幼い少年に、本気で殴りかかった・・・

## 51・救世主の名は『山丁』（前書き）

お知らせでございます。

小説家になろうの秘密基地「新・イラストコーナー」にて、鏡美有雛先生に描いていただいた朱雀と青龍社長が貼っております！  
鏡美先生のスレをご覧になってください^^

めちやくちゃ可愛いですよ

《黒雛》

## 51・救世主の名は『山丁』

「てっ、めええええええええッ！」

怒りは理性を消失させるに十分だ。

俺は拳を振り上げ、怒声をあげ、子供めがけて間合いをつめた。

そんな時、いつの間にか小脇に抱えていたクリスティーナが、俺と少年の間にチヨロチヨロ出てきたのだ。

まっすぐ少年を見据えた俺の目には、足元にうろつく子猫など映っていなかった。

少年が、あっ！ と驚きの表情を見せたことも、頭に血がのぼった状態の俺には映っていない。

あと数歩でクリスティーナの小さな体は俺に蹴飛ばされ、宙に舞うだろう。

俺はただ、少年の顔面に鉄拳をお見舞いすることしか、考えちゃいなかった。

その時突然、聞きなれた声が入る。

「クリスティーナ！！」

俺と少年の間にいる子猫を庇うように横から現れた人物・・・それ



は、

山丁・・・！

あっけに取られた俺は、沸騰した脳みそが冷めてきたのか、目の前の状況をやっと把握することができた。  
ボルテージはゆっくり降下した。

「山丁？ な、なんでここに・・・」

動揺しているとバレバレの声で、クリスティーナに頬擦りしている山丁に尋ねた。

俺と少年は目を丸くして、割り込んできた人物を見つめる。  
どうやら少年は、あまりの唐突さに言葉を失っているようだ。

山丁がガバツと立ち上がり、俺と少年を順に見回す。

「春彦、お前とこの少年がクリスティーナを見つけてくれたのか・  
・あぁっ、本当にありがとう！」

目を潤ませながら、ひしつ。と愛猫を抱く山丁。

クリスティーナ本人（？）も必死に飼い主山丁の頬を舐めくり回す。

どうやら彼は、この殺伐とした状況を分かっていないようだ。

しかし、山丁の出現のおかげでビリビリ張り詰めた空気がどこかへ失せていったのは、事実。

「お前がいなくなつてから、心配で心配で、夜も眠れなかつたんだ・  
・お腹減つてないか？ 怪我してないか？ 寂しかったろう？」  
ネコの体を何度もさすりながら、優しく愛おしく話しかける山下。  
言葉だけを聞くと、愛する彼女に甘く囁いているように聞こえるぜ。

実際はネコだけど・・・

微笑ましい彼らの姿を横目で見ながら、俺はぐったり倒れたリヨウ  
を抱え、少年に目をやった。

その光景をじっと見ていた少年が、ポツリと呟く。

## 52・その呼び名、白虎

それは少し悲しげで、辛そうな声。

「ヤツヤシノモリノカミ八輩杜守・・・そなたはそのニンゲンを慕っているのか？」

今まで無感情な声でしか会話をしていなかった少年。

だが、その声には確かに悲しみに似た感情が乗っていた。

クリステイーナが山丁の腕からするりと抜け、少年の前に歩み寄る。まるで言葉が分かつてるんじゃないかねえか、と思うくらいだ。

「にゃあ」

そっ一声鳴くと、子猫はジイっと少年の金目の見つめていた。

「・・・致し方あるまいな、そなたは望むように生きるがよい。ゆ

け、”クリステイーナ”」

ポツリと、言い捨てるように呟く少年。

待て待て、なぜ『にゃあ』って鳴き声のみで会話が成り立ってんだ？  
ネコ語解んのオ？！

クリステイーナは再び歩き出し、山丁の腕にぴよんと飛び乗り、ゆつたりとしっぽを振る。

山丁はもう一度深々と頭を下げ、礼を言つべく顔をあげると、俺の

腕に抱えられたリヨウに気付いた。

「おや・・・？ リヨウじゃないのか？ どうした、気分でも悪いのか？」

「いえっ・・・そのっ・・・」

言葉に詰まる俺は、唇を噛みしめ、顔をしかめながらうつむいた。

ピイイイイ・・・

再び笛の音が辺りに響き渡る。

「案ずる事はない。じきに目が覚めるであろう・・・さて、お手前方、用は済んだのであるう、この西の竹林から出てゆかれよ」

少年が目線を落としたまま力なく、【ハゲ竹林】から出て行くよう促した。

「まあ、リヨウは寝ているみたいだし・・・じゃあクリスティーナも見つかったことだし、帰るとするか。」

山下は一件落着きといったまとめ方で、ネコを腕に抱き、踵を返して林を後にした。

去り際に少年に手を振り、大声でありがとつと挨拶をする。

俺はリヨウを抱えて、ハゲ竹から早く出ようと、少年に背を向ける。少年は無言のまま、俺の背中を見つめているようだ。視線を感じる。

「お前、名前は？」

俺は立ち止まり、振り返らずに少年に疑問をぶつけてみた。

しばしの沈黙の後、ポツリポツリと答える少年。

「名は無い……だが呼び名ならある……小生、『千年王城・白虎』である」

名は無い。か……

朱雀とまるで同じことをいいやがる。

やっぱ、こいつが朱雀の言ってた『白虎』だったのか。

何となく嫌な予感のはしてたけどな。

つか……俺の想像図（『マツチヨ』）、全然合ってたねえ……

「白虎、さっきの言葉ホントだろうな、じきリヨウが目を覚ますって」

「小生、嘘は好かぬ」

俺の推測だが……おそらく、ネコを大切に可愛がっている山丁を見て、ネコは攫われたんじゃないって分かったんだと思う。

こいつ、悪い奴じゃあないんだろうな。

だけど、朱雀が言ったとおりここはヤバイ場所なんだな……  
今度から一応忠告はちゃんと聞こう……

落ち着きを取り戻し、止まっていた足を動かし始める。  
リヨウを背負い、ハゲ竹の出口を目指した。

「邪魔したな！ 白虎！」

俺は少年、もとい白虎に背を向けながらできるだけ大声で別れの挨拶

撈を告げる。

きつと反応は返ってこないだろう、まあそれはそれで良しとしよう。

すっかり陽が沈み、俺はうつすら瞼を持ち上げ意識を取り戻したりヨウと共に、岐路へ着いた。

「あの朱雀に興味を抱かせたニンゲン、サクライ ハルヒコか・・・  
・・・ふっ、面白い童よ」

林を下り小さくなる後姿を見て、白虎が薄く笑っているのを俺は、知らなかった・・・

## 52・その呼び名、白虎（後書き）

ああ、シリアスっぽな雰囲気は息が詰りますね…  
これから急激にラストへ突っ走ります。

### 53・ねっちょりマリモ最終回

朱雀には白虎と会ったこと・・・黙っておこう。

あれだけ忠告を受けたにもかかわらず、西の竹林（ハゲ竹）に行っちまったんだから。

バレたら間違いなく、俺の首は胴体とおさらばしなきゃならねえ。

ヒイツ・・・！ それだけはヤヴァイ。

そんな事をベッドの上で考えながら、俺の一日は今日も始まる。

騒がしい朝はこ慣れたもんだ。

朱雀と登校するのも当たり前になった。

学校で完全復活した謙吾、リョウとバカやるのも楽しいんだ。

暇を持て余す玄武を、上手くあしらえるようになった。

学校帰り、四越デパートで青龍社長に奢って貰うデパ地下アイスは格別。

家に帰ると、予告なく出没しているどんべえさん（お土産有り）にビビる。

相変わらず朱雀の取り扱いだけは注意が必要だが。

俺の周りには変なのが多いが、それは俺の生活の一部で、当たり前で、日常で・・・



もちろんいつかこの日常が終る時が来ることぐらい、俺にだって分かる。

ただ、その瞬間まで謎は謎のままにしておきたい。

朱雀の正体・『千年王城』の意味・朱雀が俺と一緒にいる理由。

もしそれを知ってしまった時、スパッツ女は急に居なくなってしまうそうで……

俺の一日はゆっくり進んでいるように感じるが、確実に終わりに近づいていく。

疲れた体を癒すために、大きなため息をついて、俺はベッドにもぐりこんだ。

眠気が襲ってきたその時。

「三郎ー！ アンタ最高だよおお」

「鼻ちようちんの三郎にはやはり、世界一の武器“ねっちよりマリモ”でなければ」

隣の部屋から歓喜に沸く妹とスパッツ女の声が聞こえてきた。

人がしんみりしながら寝ようって矢先に……こいつら……！  
おかげで目が冴えてしまったんですが。

つか、『ねっちよりマリモ』の正体って武器なの？！

っーかさ、どんなテレビよ?!

俺は謎のマリモを頭に描きながら、布団を頭から被り、奴らに惑わされぬよう夢の世界へ旅立つのだった・・・

53. ねっちょりマリモ最終回（後書き）

## 54・千年つづく王の城ありし都

そんな日常を繰り返して、季節は巡る

春

もう少しで俺は16歳の誕生日を迎える。  
また桜の舞う季節が訪れた。

市立に行けるか行けないかの境目で、俺は無事市立武城高校に入学  
が決まりました！

（イエーイ）

合格ラインギリギリだったけど。  
マジあつぶなかったあゝ・・・

俺は数日後に控える入学式まで、存分に謙吾とリョウと一緒にバカ  
をやって遊びまわっていた。そこには必ず朱雀がいる。

そんな晴天のある日、俺と朱雀は久々に暇つぶしを兼ねて、観光地  
を歩いていた。

「どれ、京都案内・親切大使のわたしが先導してやろう」  
朱雀は得意げに俺の手を引いて、観光地の中を進む。

つて、あれ？

朱雀の肩書きつて、『京都親善・世話焼き大使』じゃなかったっけ？  
すんげえ適当だな、オイ。

観光客で賑わうスポット。

綺麗に朱で染められた神宮。

目線を上げると桜の木にピンクの花がほころんでいる。

俺たちは巨大な朱塗りの門の前にやって来た。

丁度1年前もこの朱塗りの門の前に来たんだっけ。

門の周りにだけ、観光客は集まっていない。

まるで俺たちの為だけに用意されたように感じる。

じっと門を見つめる朱雀の目が、少し悲しげに・・・俺の目に映っていた。

僅かな不安が胸を過ぎる・・・

「なあハル。覚えているか？」

ポツリと門を見上げながら、朱雀が呟いた。

俺は声を落ち着かせて、何？ と言。

「わたしがハルと初めて出会ったときに、言った言葉」

目を合わせない朱雀に、俺の心臓がざわめき出している。

「忘れた・・・」

・・・忘れてねーよ、ちゃんと覚えてる。  
だけど、なんだよこれ。

まるで別れのシーンみてえじゃんか・・・

顔を背けて答える俺に、朱雀は目を細めてフツと笑ったのだ。

「なあハル。知っているか？ この地は遙か昔、千年も長きに渡り、  
王が存在したのだ」

空がぼんやり朱く染まりだす頃、朱雀が静かに語りだした。

なんだよ、この説明臭い件は。<sup>くだり</sup>

まるでラストに明かす、隠された真実。みたいな感じ、なんですか  
ど・・・

俺は無言でその言葉に耳を傾ける。

「その王の都を守護するために存在した四つの神を、ニンゲンは『  
千年王城』と呼んだのだ。千年王城により守られた都は、魍魅魍魎  
さえも寄せ付けず、華やかに栄えた。

しかし、魍魎どもから都を守る神も、ニンゲンから生まれる悪意を  
払うことはできない・・・」

朱雀の眉間に、ほんの少しシワが寄るのを俺は見逃さなかった。

「栄華の陰には必ず戦があった。ニンゲンたちが起こす戦はいつまでたっても終らず、千年栄えた都の最後の王は、民より戦を愛した。民もまた無意味な戦を繰り返し・・・そして遂にある神は都の王を見捨てたのだ」

朱雀は金の目を、ギュッと硬く瞑った・・・

## 55・ハルと朱雀の、別れ

朱雀の硬く瞑られた目は、しばらく閉じられたままだった。夕暮れの近づくこの場所に、重たい空気が漂っていた。

「神様が一人いなくなつて、千年続いた王の都は無くなつたのか？」

俺は言葉を慎重に選んで、朱雀に尋ねる。

「……うむ。南を司る神は王を見捨てた。そして程なく東の神も政を手放し、北の神は魔を放置し、西の神は……民を見放したのだ……そうしなければ、この都はいつまでも……」

1年間共に過ごして初めて目にする、朱雀の悲しげな表情。

朱雀はゆつくりと瞼を擡<sup>もた</sup>げ、赤く染まりだした空に金の目を向けた。

南の神は……いや、朱雀は人間を嫌いになつたのだろうか？

王がいなくなれば、都が滅ぶと知つてて見捨てたのか？

「けど、あれから時代はすっかり変わった。戦のない世はこんなに美しいのだ」

口元に笑みを作つて、俺に向けられた朱雀の笑顔は、やっぱり悲しげで……



きつと南の神は人間のことは嫌いじゃなかったはずだ。  
だって、親父や母さんや秋奈、それに謙吾やリヨウに向けられる笑顔は偽りじゃあないはずだ。  
俺はそう、信じてる。

「わたしは都が朽ちてからもずっとこの門から、この地を見てきた」  
そつと朱塗りの門に手をかざす朱雀。  
「ここに住まう者や、ここを訪れる者は、少なからずこの地を愛している」

朱雀はこの京都が、争いのない今の京都が好きなんだ・・・  
俺は静かに語る、彼女の横顔を黙って見つめていた。

「ハルに初めて会ったときに、尋ねた問い・・・ハルは嘘をついたな？」

悪戯っぽく微笑む朱雀に、俺はツツコミたい気持ちを抑え、そつけなく答える。

「・・・そうだったっけ」

「あの日、わたしはハルに『この地は好きか』と尋ねたが、その答えが嘘だということくらい、お見通しだったのだぞ！」

やっといつもの笑顔に戻った朱雀・・・つか、お前が鉄扇で脅して言わせただろうが。

・・・でも、あの日の俺は住み慣れた東京を離れたばかりで、新天地の京都が・・・この土地がイヤで嫌で堪んなかったんだっけ・・・

夕日を背に、朱雀は満面の笑みで俺と向き合った。

「ハルにこの地を少しでも好きになってもらいたかったのだ。京のまちで唯一、ハルだけが他の人間と違った・・・だから、側に居ようと決めたのだ。もう一度ヒトと携わろうと思ったのだ」

いつも俺に付きまといていた真実は、実に単純な理由だった。俺にこのまちを好きになってもらいたい

理由はそれだけ。

皆が俺の周りに集まった理由は、かつて人間の愚かさに嘆いて、都を・人を見放した朱雀が再び一人の人間と共にいる。朱雀を変えた人間に興味を抱くのは当然だろう。

理由は、それだけだったのだ。

俺は呆れたように、大げさに肩をすくめる素振りを見せた。それにつられる様に、朱雀が楽しげに笑う。

「ふふっ、なにせわたしは『京都親善・世話焼き大使』であるから

な！」

・・・なんだ、ちゃんと覚えてんじゃん・・・  
つか、朱雀は迷惑掛けてただけで、何もしてない気がするんですが。

朱雀はくるりと背を向けて俺に一言、告げる。

「時間のようだな・・・わたしはもう、行かなくては・・・」

その言葉は、心臓を打ち抜くほどの衝撃を・・・俺に与えた。  
それは間違いなく・・・別れの言葉だった。

「それではな・・・ハル」

## 55 ハルと朱雀の、別れ（後書き）

次で最終回です。

## 最終回・ハルと千年王城・朱雀

俺が瞬きをした瞬間。

目の前に立っていたはずの朱雀は忽然と姿を消していた。

ありえねえ出来事だが、朱雀に会って、ありえねえ出来事すらも受け入れられるようになった。

「なんだよ・・・1年間一緒に居たのに、別れ際はすげえアッサリじゃねえか・・・」

俺は一人夕日を見つめてから、目の前に居るはずのない朱雀に向けて呟いた。

一緒にいるのが当たり前になった朱雀。

ここに来るまでは隣にいたのに、家路に着こうという今、いない。

「確かに、初めてここに来た時はすげえ嫌だったよ、引越しも、転校も、この京都も」

観光地前のバス停で、我が家経由のバスを待ちながら独り言をポツリポツリと呟く。

「だけど、今やっと好きになれたんだぜ？  
お前は役目が終わったから・・・自分のいるべき場所に帰っちまったのか・・・？ 朱雀・・・」

時刻通りにやって来たバスに乗り込み、俺は家に着くまでの間、たくさんの想い出を振り返っていた。

マンション近くの停留所でバスから降りると、下がってしまった肩をピンと伸ばして気を引き締める。

いつまでもぐずぐず言うなんて、俺らしくねえ。

それに、親父や母さん、朱雀に懐いていた秋奈にちゃんと説明しなきゃなんねえからな。

朱雀はもう、櫻井家に帰ってこないって事を・・・

マンションに入り、エレベーターに乗り込むと10ボタンを力強く押した。

ガラス張りのエレベーターから見える赤に染まった空は、1年前に見たあの綺麗な夕日とダブる。

チン！

あっという間にたどり着く10階、1001号室。

俺は躊躇<sup>ためら</sup>いがちに手をドアノブに掛けた。

いつもなら俺の後から玄関へ入る朱雀。

だが、俺の後ろには誰も立ってなどいない。

意を決して、ガチャリとドアを引き開ける俺。  
玄関で靴を脱ぎ捨て、リビングへ進むと、どこかで聞いたような音  
楽が耳に入ってくる。

・・・ん？

なんだ、この変な音楽・・・？

チャツチャ、チャチャチャ　チャツチャ、チャチャチャチャーチ  
ヤチャ　チャチャーチャーチャ

前にも聞いたことがあるような・・・？  
デジャヴ？

俺は胸騒ぎに似たものを感じ、すぐさまリビングへ駆け込むと、テ  
レビが設置されてある方へ鋭い眼差しを向けた！

「遅いではないか、ハル」

突然聞こえてきた、間の抜けた声。  
それは毎日毎日耳にしてきた声。

さも俺が悪いみたいな言い草で、話しかけてきたのは・・・

「朱雀・・・？」

いなくなったはずの朱雀が目の前で、夕方の再放送ドラマを座って  
見ているじゃありませんか。

・・・つか、あれ？

さっき俺たち、さよなら的な雰囲気で別れたよ・・・な・・・？

俺が呆然とリビングで突っ立っていると、朱雀は何もかも見透かし  
た笑みを湛<sup>たた</sup>えて説明調に話し出す。

「あやうく夕方の再放送番組を見逃すところであつた、危ない危ない  
い」

ニンマリ、いや、憎つつたらしい微笑を向けてくる朱雀。

ああ、『もう帰らなくては』ってのは、夕方のドラマが始まっ  
ちまうから、早く（俺の）家に帰らなきゃ。って事か？

ああ、忘れてたぜ・・・こいつが可愛い女の子の皮を被った、悪魔  
だってこと・・・



してやられた・・・く、クソスパツ女あああああー！

「ふふつ、安心するがよい、ハル。わたしはずっと付いていてやるからな！」

朱雀の弾んだ声が耳を通り抜ける。

俺は心の中で絶叫しながらも、これから言わんとする言葉はなんとも情けねえ。

だって、保身が大事だろ？

俺は目に薄つすら涙を浮かべながらも、必死に口角をつり上げ、鉄扇片手に微笑む朱雀へ一言。

「……ウレシイナァ……。これからも朱雀と一緒にいれるなんて……さ……」

春は出会いの季節、見知った土地の京都。

俺は千年王城と共に、愛すべきこの地で暮らしていく

おしまい（ぐすん・・・！

## 最終回・ハルと千年王城・朱雀（後書き）

今までお付き合いくださり、心から感謝致します。

展開が急だったことはこの場を借りて謝罪いたします。すみませんでした。

段落も、三点リーダーも、カッコ類もお構いなしに好き勝手に綴り、至らない箇所が多々ある事と思いますが、「千年王城」を見捨てずに読んでくれた皆様、本当にありがとうございます！！

黒雛 桜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1379d/>

---

千年王城

2010年10月10日06時25分発行